



うつせみのあなたに
短文集 その2

星野廉



目次

| | |
|--|----|
| 巻物をめくりめくる * | 3 |
| まぼろし * | 9 |
| 視覚は体感を裏切り、裏切るという形で体を導いている * | 13 |
| 移動しながら静止している * | 23 |
| おもかげ * | 33 |
| トイプードルに勘亭流は似合わない * | 41 |
| 象さんの話 * | 49 |
| 言葉の綾だけでなりたっている文章 * | 57 |
| 抽象の具象性、具象の抽象性 * | 65 |
| 有名は有数、無名は無数 * | 69 |
| 有名は無数、無名は有数 * | 75 |
| 指が知っている、体が覚えている * | 83 |
| 言語活動はプレイなのです。 | |

| | |
|-------------------------|-----|
| * | 93 |
| する、される | |
| * | 103 |
| 歯ブラシを共有することができますか？ | |
| * | 115 |
| 外にあって、外からやって来て、外であるもの | |
| * | 125 |
| 続・外にあって、外からやって来て、外であるもの | |
| * | 129 |
| 宝の持ち腐れ | |
| * | 143 |
| 言葉を言葉として読む | |
| * | 149 |
| 日常生活の演技、テレビドラマの演技 | |
| * | 155 |
| 言葉ではない言葉 | |
| * | 161 |
| 言葉の重み | |
| * | 167 |
| 言葉をあがめる | |
| * | 173 |
| 抽象を体感する、体感を抽象する | |
| * | 181 |
| 引用と演技からなる自分 | |
| * | 191 |

卷物をめくりめくる

＊

キャラクターがローラーでペンキを塗りながら走りまわっているゲームを見て、パソコンで見る文書に似ていると思ったことがあります。いま考えると馬鹿な思いつきですが、たぶんローラーという言葉から、スクロールやロールつまり巻物を連想したのでしょう。

語源的にはつながりがないと思われる、スクリーンまでが頭に浮かびました。roller、scroll、roll、screen というわけです。そういえば、たしかにパソコンのスクリーンつまり画面ではスクロール、スマホの画面ではスライド (slide) して「巻物」を見ていきますね。

マウスやフラットポイントをつかうか、それとも画面に指をすべらせて、なぞるかの違いはあるものの、手や指の細かい動きに連動して画面が上下に移動します。

＊

パソコンやスマホで閲覧できる文書は、横書きで上下に移動するものが主流ですが、縦書きだと左右に動かすことが可能です。ローラーのもとになっているロールは文字どおり巻物であり、ページがあっても、それは巻物を区切ったものにすぎません。

巻物を切ってページ (葉・板) にした。ページ (葉・板) をつぎ合わせて巻物にした。どちらが先にせよ、人の視界には枠があり限りがありますから、ある部分しか見えないし読めないということでしょうか。

そういえば、カーソルやポインターの先が、人の視界にある焦点に当たるのかもしれませんが。枠があり焦点がある。これは人の意識の限界 (限界は集中でもあります) の比喩のように見えます。

とてつもなく長い巻物がネット上に存在しても、パソコンやスマホの画面という枠内で——人には一つの画面を見るほどの視野しかないのかもしれませんが——、くるくると回しながら閲覧するしかないようです。

くるくる回るのは人というよりも、人の焦点であり意識の中心点です。

そういえば、映画 (movies) はもともとぐるぐるに巻いたフィルムという形のものを、映写機をつかってスクリーンという長方形の面に写した影絵でした。動くスライド、つまり活動写真というわけです。

その一場面を静止した画像としたのがスチール (still) 写真だったと聞いた覚えがあります。たしか映画は静止画像をコマ送りするという仕組みだった記憶があります。

錯覚に基づいているのですね。

*

映画といえば、サウンドトラック (sound track) というのがありました。うろ覚えなので調べてみると、トーキー (talkie) 映画の長いフィルム (film) の脇に帯状に磁気を塗って録音したとか。

テープレコーダー (tape recorder) のテープ (tape) がフィルムの端っこにくっついていようなものでしょうか。きっとすごく細かったのでしょうかね。カセットテープのテープよりも細かったのでしょうか。

オープンリールなんて懐かしい言葉も思い出しました。たしかに、あれはオープンとかむき出しの磁気テープでした。それが小型ケースつまりカセットに収められたのがカセットテープということでしょうね。このカセットテープも、いつの間にか、懐かしい響きの言葉になりました。

そういえば、録音テープも写真や映画のフィルムのように巻きますね。まさに巻物ではないですか。円盤 (disc/disk) の形をしたレコード (record) も細い溝に凹凸だったかキザギザだったかがあって、それで音が出る仕組みだったらしいです。

これも錯覚に基づいた仕組みです。錯覚を知覚と曲げて言い換えても事態は変わりません。錯覚に基づいた婉曲表現だという意味です。

*

レコードという仕組みでは、音声を凹凸状にした溝が、渦巻き状に円盤（ディスク）に刻まれていて、それを針がぎこぎこしながら音に再現し、その音を耳にした人が直線状に楽曲として聞いていきます。

つまり、円から直線へという流れです。これは、楽曲を溝という形にして巻かれた直線という円（レコード）が、直線という楽曲にもどるとも言えます。直線が円でもあるという意味です。

まさに抽象と具象の戯れというか変容というか絡み合い。その絡み合いが具体的に起きる場が人の体なのあり、それが体感なのでしょう。

丸く巻いたフィルムや磁気テープもレコードも映像や音声を収めた巻物だったという気がしてきました。巻けば長いものがコンパクトに収まりますもんね。

なるほど。うまくできています。人は、巻物をめくる生き物のようです。巻物をめくりめぐり文明を築きあげたと考えると、目くるめく思いがします。

*

roller、scroll、roll、screen、slide、movies、still、sound track、talkie、tape recorder、tape、disc/disk、record。

ローラー、巻物、巻く、転がす、銀幕、画面、すべる・すべらせる、映画、活動写真、静止写真、サウンドトラック、トーキー映画、テープレコーダー、磁気テープ、レコード。

調べるのは最小限にして、言葉や単語をながめながら、そういえば、そういえば、と

記憶の底から立ちあらわれてくるイメージを楽しむ。

頭の中、いや体の中にあるにちがいない長い巻物をめくりめくって、やはり内にある銀幕に映してながめているような気分です。いろいろな物語が見えてきて飽きません。

まぼろし

＊

まぼろしについてお話しします。

まぼろしは、幻とも書けます。訛って魔滅ぼしとも書けます。魔滅ぼしとか真滅ぼしと書いて何とかこじつけ、もっともらしい説明ができそうです。魔を滅ぼすからまぼろし、真を滅ぼすからまぼろしなんて具合です。

いま並べたご託ですが、まさにまぼろしです。実体なんてないんです。裏に真実なんてない。言葉がおどっているだけ。だから、真を滅ぼすという理屈です。

実体のないものなんて怪しいですね。魔物とか怪物みたいなものです。だから、魔を滅ぼすという飛躍になります。

「ま」とは、まことに不思議な言葉で、どんな漢字を当てても、それらしく思えてきます。真、魔、間、目。こう並べてみると、似ているところがあるというか、つながりそうに見えてきます。真を感じるし、同時に魔も感じます。

＊

一見関係なさそうなものがつながっているような気がする。これはわくわくします。何かと何かを見てしまうという心理に似ています。何かと何かは別物なのに、遠い親戚みたいにつながってしまう気がするのです。

想定していた隔たり、つまり間がふっと消えてしまう。これが間滅ぼしです。たいていの物は多面的ですから、多面的な物同士をこじつけると、どこかでつながってしまうのです。

物の見方が変わるとも言えます。ある物を見ていた目が、ずっと入れ替わるイメージ。目が消えて別の目になる。目滅ぼしです。苦しいギャグですが、細かいところには目をつむっていただけると嬉しいです。

見えないものを見るのではなく、見えているものに目をつむる。これがまぼろしと出会うコツなのですが、じつは気づいていないだけで、誰もがまぼろしとしょっちゅう出会っているようです。

世界はかかわり合いでなりたっているというお話でした。

視覚は体感を裏切り、裏切るという形で体を導いている

＊

パソコンではマウスやフラットポイントを手や指や腕をつかって動かし、スマホでは指を画面にすべらせる。基本的には円を描く動きが多い気がします。というか、指を走らせて何かをえんえんと回しているのです。

ゲームでは指でコントローラーをいじっているようですが（これも基本的に回していませんか？）、自分ではやったことがありません。ゲームは人生だけで十分なのです。

人の手のひらや指は脳と直結した神経や「センサー」が集まっている場所だと言われています。そう考えると機械や機器をコントロールする装置を操作するために、手と指がつかわれるのは理にかなった選択だと感心します。

なるべくしてそうなっているのでしょう。

手や腕の微妙な動きが機械の動きに連なるという点では、車の運転にも似ている気がします。自動車では車輪の形をしたハンドル（wheel）を操作して四つの車輪（wheel）が動くようです。

長方形の車の前面に円柱状のローラーを付けたなら、道路にそってとてつもなく長く伸びた長方形が描けそうです。しかもその長い長方形には緩急さまざまなカーブもあるのです。

＊

円、円柱、球、長方形、直方体、直線、曲線、点、線、面。

図形や図形を成りたたせている要素がつぎつぎと変換され、それに応じて動きの有り様が移りかわるさまを想像すると、目まいを覚えます。時間の経過にともなう、形と動きの反復と変容と変奏は、映画に似ています。

映画は図形や図形を成りたたせている要素を体感させる魔法です。人はたぶんこの体感に嗜癖（依存）しています。めちゃくちゃ気持ちがいいからやめられないという意味です。

長方形の車体が、長方形の組み合わせである道路を前方へとすべっていく。前方に進みながら、ときにはかなり急なカーブを進む。ヘアピンカーブでは数秒前と逆の方向に走ることもある。

曲線を細かく見ていくと直線になるとかいう学校で習った話を思い出します。円もそうでしたっけ？ 地球の地平線や水平線を考えるとそうかもしれません。体感ではそんな気がします。

体感と知識の食いちがいに唾然としないではいられません。とくに図形や図形を成りたたせている要素は、体感を裏切って自然界や宇宙に存在している気がします。その意味では抽象なのかもしれません。

図形は体感できるものではなく頭で理解するものなのではないか、という意味です。その意味で、視覚は体感を裏切り、裏切るという形で体を導いている気がします。「ちがう、そうじゃないよ」というふうには。

視覚が抽象への扉に思えてきました。

*

抽象は頭で理解するものでさえない気がしてきました。たぶん、頭でも体でも分けられない、つまり分からないのです。その有り様をイメージするしかないというか。イメージとは隔靴搔痒な遠隔操作にほかなりません。ままならず、もどかしいけど、これしか、なぞり描く方法はないという意味です。

抽象を、算数や数学で出てくる図形や図形を成りたたせている要素に代表させて考えてみます。たとえば、自然界ではめったに肉眼では見られない、整然とした形の、円、円柱、球、正方形、立方体、長方形、直方体、直線、曲線、点、線、面のことです。

人のつくる、つまり人工の産物である整然とは、不自然であり反不自然ではないかと思えるくらいです。無駄なく切りそがれ整いすぎているのです。

人のつくるもの（たとえばスーパーに並ぶ商品やパソコンや車）や、つくったものをつかっての動き（たとえばスーパーに並ぶ商品やパソコンや車をもちいての身振りや動き）は、上記の整然とした図形や図形を成りたたせている要素に満ちていますが、ふつうそれは意識されません。

抽象とは、人の目をすり抜けるもので、見ているのにそれだとは気づかなかったり、何か分けられない、つまり分からないままに見ているものである気がします。

いま書いた文を読みかえすと、当たり前のことを言っています。目に見えないはずのものである抽象が、見えないし分からないと言っているのです。見えないものが見えない、なんてがっかりするしかない、身も蓋もない話をしているわけです。

とはいうものの、見えないもの、つまり抽象が見えないということ、頭で理解するのではなく、体感できるのかどうかというと、話は別です。ややこしい話になります。

＊

上で述べた「当たり前のことを言っています」とは、頭で理解した上での、理屈というか論理というか、言葉での辻褃合わせの話なのです。私には「当たり前」と「なぞ」とが同義に思えてなりません。

「当たり前」とは「分からない」の言い換えなのかもしれません。どちらも大差が無いという意味です。途方にくれて手をこまねき、婉曲に「分からない」と言っているのです。少なくとも私の場合にはそうです。

現実界（そんなものがあればの話ですけど）と言葉の世界（そんなものがあればの話ですけど）に食い違いがないという前提に立っていれば、「見えないもの、つまり抽象が見えない」は当然であり、見方を変えれば騙り、つまりペテンということになります。

一方で、言葉は現実と食い違っていて対応していないというのもまた、誰が語ってても騙りになるという理屈になります。言葉は人が想定しているよりも欠陥品であるからです。欠陥品に完璧を望むほうが、土台無理な話であり不合理だという意味です。

*

パソコンではマウスやフラットポイントを手や指や腕をつかって動かし、スマホでは指を画面にすべらせる。ゲームでは指でコントローラーをいじっているようです。

手や腕の微妙な動きが機械の動きに連なるという点では、車の運転にも似ている気がします。自動車では車輪の形をしたハンドル（wheel）を操作して四つの車輪（wheel）が動くようです。

長方形の車体が、長方形の組み合わせである道路を前方へとすべっていく。前方に進みながら、ときにはかなり急なカーブを進む。ヘアピンカーブでは数秒前と逆の方向に走ることもある。

長方形の車の前面に円柱状のローラーを付けたなら、道路にそってとてつもなく長く伸びた長方形が描けそうです。しかもその長い長方形には緩急さまざまなカーブもあるのです。

円、円柱、球、長方形、直方体、直線、曲線、点、線、面。

図形や図形を成り立たせている要素がつぎつぎと変換され、それに応じて動きの有り様が移りかわるさまを想像すると、目まいを覚えます。

*

人の手のひらや指は脳と直結した神経や「センサー」が集まっている場所だと言われています。そう考えると機械や機器をコントロールする装置を操作するために、手と指がつかわれるのは理にかなった選択だと感心します。

筆やペンだけでなく、パソコンやスマホで文字を書くさいに、手と指がつかわれているのは興味深いですが、書いているときに、文字の形を意識するでしょうか。たぶん、ほぼ無意識に書いていると思いますが、これは学習の結果です。

文字は具象である点や線から成りたっているのに、それを意識していると邪魔になります。文字が形に見える状態で、文字を書くことはできても、文は書けないという意味です。文字と文は異なる次元にあるからです。数字と数（すう・かず）も同じでしょう。

文字を文として（言葉として）書いているときには、人は具象と抽象のさかい目にいるのではないのでしょうか。それは読んでいるときにもそうだという気がします。

文書を書くだけに限らず、パソコンやスマホを操作しているとき、ゲームをしているとき、車の運転をしているとき、映画を見ているとき、テレビを見ているとき、スポーツをしているとき……。

そういうときの人は、具象と抽象の境目、あるいは具象と抽象という分け方を中傷し愚笑するような場で動いているのかもしれませんが。

＊

たぶん、人は自分が知らずに思いの中でつくってしまった抽象を、具象としてとらえて利用しているのです。ただし、利用しているさいには、抽象対具象という分け方は意味を成しません。抽象だからです。

そのさいには視覚が先導しています。脳と体を導いているのです。「こっちだよ、こうするんだよ」と視覚が導くと、脳と体が「え？」とか「……」というふうにもわけも分からず動く。

視覚は動けないから、指示するだけ。そんなイメージです。

視覚は動けない代わりに抽象を察知するのに適した知覚なのです。ただし、察知された抽象は、人の脳と体においては具体的に動かなければなりません。これが具象とも言

えます。言えるだけです。

※ここでは「言える」という話をしていて、「である」という物語はしていません。言葉をつかっている以上、「言える」としか言えないのは論理的な帰結かと思われます（ただし論理的が論理的であったり正しかったりする保証はありません）。

具象とは動詞であり、抽象は名詞だ、という抽象でお話をつくることもできるでしょう。いわゆる捏造のことです。

ここでの「動く」とは誤魔化しがきかない「物理的な」ものをイメージしています。いましているのは、あくまでもイメージの話なのです。科学とか客観とか普遍という言葉とそのイメージや物語とは無縁です。そんなたいそうな話が、この書き手にできるわけがありません。

なにしろ、語るは騙るしかないという前提でお話をしているのです。

*

太古から、手や指や手のひらをもちいて、癒やすとか、治癒するとか、相手の気持ちを静めるとか、相手の気を引くとか言われているのを思い出します。具体的には、かざす、なでる、こする、あてる、おす、つねる、ひっかく、たたく、という身振りです。

こうした身振りは、いまでも日常的に体感なさっているにちがいありません。

目と手（たぶん足も）は体感という働きにおいて端末のような役割を果たしているのかもしれないね。

動くが動くではなくなる瞬間や持続した時間、これが体感だとすれば、その中では、抽象と具象とがまじりあって、絶妙な働きをしているのではないか。そんなイメージを持ちます。難しい話ではありません。歩行や自転車に乗るとか泳ぐ場合を思い出してください。私はかなづちですけど。

思いだす、思いうかべる、思いえがく、思いをめぐらす。

イメージという隔靴搔痒きわまる遠隔操作でしかとらえられない話のようです。言葉という、これまた隔靴搔痒きわまる遠隔操作よりは、体感にわずかでも近いかな、なんて具合に語り騙るしかないようです。

人は動きをとらえるのがめちゃくちゃ苦手なようです。だからこそ、それを補おうとして、ここまでいろいろな補助具をつくったとしか考えられません。皮肉ではなく、これはすごいことだと思います。

補助具とは、たとえば、指先でちょちょ回したり、手でいじったり回したりして——円運動を直線や曲線に変換している気がしてなりません、その動きをえんえんと繰り返せば、静止したまま進まなくてもえんえんと進めるからでしょう、たぶんアナログ時計の動きと時間の進み方の関係と同じです——、外部にある動きを連動させる仕組みや、見えない動きをとりあえず自分の都合に合わせて見えるようにする仕組みのことです。

あっさり書きましたけど、すごい仕組みだと感心します。恐ろしいくらい。

見えるは見えないでもあり、人は目に映っているものを見ているわけではない、という「当り前」のお話でした。

移動しながら静止している

＊

車の話です。

運転者や同乗者は動いていながら動いてはいない。というより、自分が動いているとつねに意識しているならば、きっと差障りがあるのでしょう。

車は動いているけど、自分は左右にも上下にも動いていない、つまり快適だ。さもないと酔うに決まっています。事故を起こすにちがいません。

車も人もうまくできているなあと感心せずにはられません。列車も船も飛行機も、そしておそらく宇宙船や宇宙ステーションも。

自転車もそうです。忘れていました。あれは全身で乗っています。もう乗れない体になりました。

あと、体や意識もそうです。人は体や意識という器とか乗り物に収まっているのではないかという話です。どう思うかは人それぞれです。

＊

車では、運転者がカーナビの画面を見ることがあるし、音楽を聞いていれば、意識の一部は遠くどこかに飛んでいる。同乗者と会話したり、考えごとをしていても意識は部分的に飛ぶに決まっています。それでも運転はできるのですから、車がそういうふうにつくられているのでしょう。

乗り物では同乗者や乗客がパソコンやタブレットやスマホをいじっている場合もあります。自分の体が移動しながら、頭の中でめまぐるしく移動したり動いたり歌ったり読んだり書いたりしているわけです。

場所とか移動とか自分とか他人、そうした言葉でしか知らない事物や現象が不明に感じられてきます。そうしたもの同士の境も分からなくなってきました。たぶん分かったり考える必要はないのでしょうか。考えることが、ときには生きる妨げになるという例でしょうか。

＊

自分が動かずに動きを見るという点では、車やインターネットは、スクリーンを見るテレビや映画に似ていますが、自由度が異なります。テレビにはチャンネルが換えられ、見ないでもいられるという自由度があります。

一方の映画には、極端に言うと、椅子にくくりつけられてスクリーンを強制的に見る不自由さがあります。

この不自由さの極致が夢です。夢はどうにもなりません。椅子に縛られて強制的に見せられるのが夢です。しかも観客はひとりだけなのです。

どんなに愛している人とも、いっしょに夢を見ることはできません。眠った瞬間に、人はひとりになります。たとえ、ふたりで寝ていても。

文字どおりの同床異夢ですが、これとは逆の異床同夢を夢見てつくられたのが、映画やテレビやネットなのかもしれません。好きな人と同じ夢を見たい、同じ夢の中にいたいものです。

人でいるとは、それぞれが別人として生きることです。ふつう他人とは言わない親子でも別人です。

愛する人や仲間と同じ夢を見たい、同じ夢の中にいたい。死後も……なんて夢見るのは、たぶん欲深いのでしょうか。こればかりは死んでみないと分かりません。

とはいえ、たったひとりで見るのが夢と夢うつつであり、集団で見る夢と夢うつつが現実(うつつ)なのであれば、集団で見る夢としてあの世があってもいいというのは、魅力的な考えですね。

私はひとりでいるのが好きなので、個人的には、あの世でもひとりで見える夢が見たいです。ああ、なんて貪欲なのでしょう。まるで、あの世に行くのが当然みたいな口ぶりですね。そんなの分からないのに。

*

現在は、場所や移動や静止という言葉でイメージしていることが不明になっている時代だと思います。

移動するといえば歩くか走るしかなかった時代には、場所も「ここ」と「あそこ」と「ずっとむこう」くらいのもではなかったでしょうか。馬に乗るや、牛に乗るや、馬車や牛車や舟が出てきて、人の場所についての言葉やイメージが変わったと想像します。

自分が器か乗り物に収まっているのではないかという思いはもっと古くからあったかもしれません。夢、思い、想像、空想では、「ここ」が不明になります。「あそこ」や「むこう」に居たり行ったり帰ったりするという思い、つまりイメージは太古からあった気がします。

*

思いの中の「ここ」と、現実の「ここ」ではぜんぜん違うという考えもあるでしょう。

まわりを見まわしてください。どこにいるかを確認したら、目をつむってみてください。目をつむって、さっき見て確認した「ここ」を思い描いてみてください。

目を開けて見える「ここ」と、目をつむって体感する「ここ」は違っていませんか？

*

自分の居る場所を正確に言葉と数字で言ってみてください。

国名、県名、市町村名、番地、建物なら何階の何号室。乗り物に乗っている場合には、どこを移動しているのかできるだけ詳しく言葉にしてみてください。

そこが、たぶん抽象的な「ここ」です。抽象ですから体感できません。体験できない「ここ」だと言えます。

＊

いま挙げた全部が「ここ」なのだと思います。

そう考えると、「ここ」って不明ではありませんか？ こことは、こころにあるところだという気がします。

そうじゃない方もいらっしゃるにちがいません。人それぞれです。「ここ」もいろいろ、「こころ」もいろいろ、人生いろいろ。「ところ」変われば、品変わる。

＊

自分が地球に居ることは確かでしょう。あるいは銀河系とか、宇宙でもいいです。この世でもいいです。それも「ここ」でしょう。

「ここ」には「あそこ」や「あっち」や「かなた」や「むこう」も含まれているのかもしれない。たぶん、そうなのでしょう。

202〇年〇月〇日〇時〇分というふうに、時間というか時刻も、「ここ」とは切り離さない気がします。切り離せば、それは抽象になるという意味です。

個人的には、「ここ」と「いま」あつての「ここ」と「いま」だとイメージしています。

かつての「ここ」、あの時の「ここ」、これから来るだろう「ここ」。

地球は動いているとか、宇宙は膨張しているというのは、知識であり情報です。抽象という意味です。いくら数字や数式や公式を挙げても、抽象を体感するのは難しいと思います。

体感できない気づきとか学びの多くは抽象です。知識とか情報の多くも抽象ですから体感できません。ここでは、おもに体感の話をしています。

体感が偉いと言っているのではなく、また正しいか正しくないという問題でもなく、体感の性質の話をしていると思ってください。

たとえば、天動説は体感できます。地動説は体感できません。人はこども時代に天動説を信奉し、やがて地動説に改宗するが、その後も密かに天動説の信者でありつづけるとも言えそうです。

大切なことなので繰り返しますが、正しい正しくないの話をしているのではありません（そんなややこしい話は、ここでは無理です）。念のため。

ま、これも人それぞれです。上で述べた抽象を体感できるとおっしゃっている人の頭の中を、「どれどれ」と覗くわけにはいきません。

*

「同じ」とか「同一」という言葉とイメージをつかって考えてみましょう。

テレビのCMでマヨネーズが出てきたとします。その商品は、自分の家にある商品と同じです。「これこれ、これよ。三週間前に、スーパーでケチャップといっしょに買ったのよ」という感じ。

別のCMで、渋谷のスクランブル交差点が出てきたとします。そこには三十年前に、あるいは三年前に、または三日前に行ったことがあるかもしれません。「あそこ、あの信号の真下にいたことがある」という感じ。

で、その同じマヨネーズですが、同一ですか？ 同一とは原則として世界に、宇宙にたったひとつしかありません。

で、その信号の真下ですが、いま自分がそこにはいない、CMで撮影された日の「そこ」は、自分の居た「そこ」と同じなのではないでしょうか？ いま居る「ここ」に居ながら体感できない場所を「そこ」と称して、同一の場所だと言えるのでしょうか。

言うだけなら言えると思います。言葉をつかうと何とでも言えるからです。考えこむ人もいるでしょう。人それぞれです。

「いま」と「ここ」は切り離せない。同様に「あのとき」と「あそこ」は切り離せない。そう考えると、CMに映っている「あそこ」が、自分の居た「あそこ」とは同一だとは私には思えません。

CMの「あそこ」（正確には「あのとき」の「あそこ」です）には自分は居なかったという意味です。

*

パソコンやスマホやゲーム機などの端末の画面に見入っているとき、自分はどこにいるのでしょうか。音楽を聞いたり歌っているときの自分はどこにいるのでしょうか。

車を運転したり、乗り物に乗っているときの自分はどこにいるのでしょうか。運転中に誰かと話したり、考えごとをしたり、音楽を聞いたりしているときの自分はどこにいるのでしょうか。

乗り物で移動しながら、端末の画面に見入っていたり、誰かと会話したり、物思いにふけているときの自分はどこにいるのでしょうか。

たとえば、端末の画面に見入ったり、運転席からの車窓を見ているとき、端末を操作

したり、運転している人はたいてい静止しています。というか、静止していると思っています。

静止していると思いきや、こんでいたりとか信じているのほうが正確かもしれません。

静止していながら、画面の中に見える、あるいは正面に見える、直線を進んだり、直線上で迷ったり、カーブしたり、回転したり、上下あるいは左右反対になったりしているのですから、画面を見たり、機械をいじっている人は不思議な時空にいるように思えてなりません。

*

たぶん、静止しながら、つまりある場所で足踏みしながら、円運動をしているのでしょう。円運動をえんえんと繰り返す。その円を切って伸ばせば、えんえんと伸びる直線や曲線になります。

スクロールや、スライドや、コントローラーの頭などでや左右縦横凹凸運動は、じつは巻物（ロール）をどンドンめくっているのです。巻物を伸ばせば、直線にも曲線にもなるでしょう。しかも上下運動ありです。

移動する、道を進む、ゲーム空間で動く、印刷された文書を読む、ネット上で文書を読む、動画を閲覧する、電子書籍を読む——こうした動き全部が円運動の反復と連動しているのではないのでしょうか。

それが静止したまま進む、つまり移動する仕組みだという気がします。空間の操作だけでなく、時間の操作でも同じだと思います。長針と短針が円を描くアナログ時計と、時間の進み具合の関係と似ています。

円運動はとどまりながら進む、あるいは進んだ気持ちになるという横着な方法であり名案なのです。

*

場所も時間も不明だという意味です。その不明という思いと、自分は動いていないという体感だけが、具体的な体験として「いま」「ここ」にある気がします。

さもないと、運転ができないし、端末を操作できないし、画面を利用できないし、そもそもおかしくなってしまう気がします。

これ以上おかしくならないために、この辺で失礼いたします。

動くとは止まっているとは、そうだと決めて、自分に言い聞かせることではないかというお話でした。

もっと簡単に言うと、動くとは静止することになり、というお話でした。

おもかげ

＊

毎日Instagramで更新される犬のアカウントを見ている。三年前に半年だけ飼った犬と同じ犬種が出てくるアカウントです。これが同じ動物だとは信じられないくらい、犬は犬種によって容姿ががらりと違いますが、同じ種類だとその面影をたどることができるので、ついついそのアカウントのわんちゃんを見てしまいます。

楽しくもあり切なくもある習慣です。私の病状が急に悪化したために飼い続けるのを断念したという事情があるからです。その子は現在新しい家族のもとで暮らしています。

面影はいい言葉ですね。面と影の組み合わせがわくわくする連想を呼ぶし、辞書の記述を読んでもとぞくぞくします。このところ私がよくつかっている、「何かに何かを見る」という言い回しと似た発想の語義もあります。そのほか辞書には「面影に立つ」とか「面影付」という知らない言葉の説明も載っていました。

森鷗外が「於母影」という訳詩集を出していたと知ったのも収穫でした。鷗外主宰の結社の同人による翻訳詩を集めた本らしいのですが、翻訳というところに「おもかげ」の意味が重なります。翻訳とは原文のおもかげを別の言語による表現によってたどる行為ではないでしょうか。於母影という当て字も、想像力をかきたててくれます。

おもかげは俳とも書らしいのですが、これは人と弟をくっつけた字なので気になって漢和辞典を調べてみました。「兄弟は似ている」からという、いかにも分かりやすい説明があり、さらに日本製の漢字だと書かれていて笑ってしまいました。お茶目な感字ですね。

あの子ではない犬にあの子の面影をたどっているとはいえ、見ているのは実物の犬ではなく、パソコンの画面での話です。画素の集まり。何かに何かを見る。最近こんなことばかりを考えています。抽象と具象という言葉が気になってならないのです。

＊

数字にも顔があり、顔があるからには、面影をたどることができます。ある数の連なりがある人にとっては特別の意味を持ったり、その人独自のイメージを呼びさますという意味です。

たとえば私が好きなのは、7というアラビア数字、十という漢数字、000という連なりなのですが、どれもその形と音に惹かれます。数（すう・かず）ではありません。

数字が入ったというか、数字にちなんだ名前があります。音的には「いちろう」「こうじ」「さんきち」などがあり、使用する文字では、「いち、一壺市」「に・じ、二次治」「さん・さぶ、三佐武」といったバリエーションをイメージしているのですが、こういうことのできる日本語が好きです。

私の本名にも、いま挙げた漢字のうちの一つが入っていて、次男だと勘違いされた経験が何度もあります。

この場合の数字とは、文字や文字列であり、その読み方という意味での音——七であれば「なな」や「しち」ということです——でもあります。数（すう・かず）ではありません。数字とは「文字」でもあるのです。

ひとりっ子の私は、次男と勘違いされるたびに苦笑はしても深くは考えないのですが、あるときに「ひょっとして次男なのではないか？」という疑問が浮かんでしまったことがありました。母に確かめるのはばかれてそのままにしましたが、母が亡くなり確かめるすべがなくなっただけは、その不穏ともいえる疑問を懐かしんでいる自分がいます。

人がそのものずばりの数字で呼ばれることがあります。刑務所に入った経験のある人がその「ルール」を屈辱と感じたという証言は多いです。自分に向かって投げられた数字をその人は決して忘れないし、その数字をどこかで見聞きするたびに呼び起こされる苦しみは一生続くだろうと想像します。

数字は抽象的なものだと考えられがちですが、いま挙げた例での数字は決して抽象で

はないと思います。むしろ印象の世界の話です。さらにいうなら具象なのです。

*

私がよく閲覧する複数の犬のアカウントでは、愛犬の名前を印刷したタオルがはやっています。写真の説明がどれも同じ文句なので気になって調べてみると、業者が宣伝のためにアクセスの多い飼い主たちにタオルを無料で提供しているらしいのです。

愛犬の名前を印刷したタオルを飼い主に勧めるだけでなく、犬を飼っている人への贈り物にもどうぞと業者は宣伝しているのですが、愛犬家や犬好きの人をターゲットにしたそのマーケティングのうまさに感心しました。私自身もほしくなったほどです。

犬関連のインスタグラムのアカウントを見ていると、マグカップやTシャツやエサ用の皿に、犬の名前だけでなく顔や姿を印刷して販売するサービスの広告が目につきます。愛犬の画像を送れば、それをCGか何かを利用して商品に印刷するみたいです。

いま飼っている犬だけでなく、お別れした犬の顔を印刷した日用品を持つことで、追憶にふける人もいるのではないだろうか、わが身に重ねてそんな想像をしてしまいました。そうやって面影をしのぶわけです。

*

しのぶ、偲ぶ。いまここにはない存在を心にえがく——。辞書では「偲ぶ」の隣に「忍ぶ」が記載されています。ひょっとしてと思って調べると、案の定「忍ぶと混同して生じた」と広辞苑に書かれていました。

人は理由なしに混同や間違いをすることはありません。うっかりもあるかもしれませんが、通常は似ていることから生じる連想が働いて間違うのです。こういうのを類推とも言いますね。それが言葉では頻繁に起こって言葉が移ろい、その結果としてその言語は豊かになると言えます。

言語とは個々人の私的なイメージと連想をともなった言葉たちの総体であり、それが時とともにずれていくことがその言語の歴史となる。こうした現象はどの言語でも起

こってきたことであり例外はない。そう私は理解しています。

言葉の変化にケチをつける人がどの時代にも、またどこにもいることもまた確かでしょう。抵抗勢力がいても、言葉はこれまで同様にうつろい続けていくにちがいありません。生きているからです。

「似ている」というだけで起こる、混同、勘違い、言い間違い、類推がいまある言葉のありようをつくってきたという意味です。生きているもの、いまあるものを否定することはできません。

「似ている」は人にとって基本的な認識の形式だと思います。「似ている」と感じる思いがあるからこそ、「おもかげ」や「しのぶ」があるのです。

*

ふと思ったのですが、愛犬の顔や姿を印刷した商品が送られてきてクレームが付く場合があるのではないのでしょうか。「似ていない」とか「違う」という苦情です。視覚的なイメージはきわめて個人的なものであり、愛着が強いほど容姿が「似ている」かどうかをめぐる判断はことさら詳細をきわめるものとなる気がします。

一方で、名前ではこうした苦情は起こりません。数字だとなおさら起こりません。愛する犬の名前に文字に誤記がない限り、あるいは生年月日の数字に間違いがない限り、「これは違う」「返品します」「作り直してください」というクレームは生じないにちがいありません。

なぜなのでしょう？ 言葉と数字だからです。言葉と数字が、「この場合には」抽象だからです。

言い換えると、「似ている」「似ていない」という印象の話ではないからです。さらに言い換えると、言葉と数字もまた容姿と同じくイメージや印象をとまなうことはありますが、時と場合によって抽象になりうるという点が決定的に容姿と異なるからなのです。

抽象は普遍でもあり、どこでも同一です。一方の具象は印象でもあり、個人的なイメージのもとにあり、似ている、似ていないという印象で判断されます。抽象と具象がべつべつに存在しているわけではなく、あるものが人の見方によって抽象にも具象にもなると考えられます。

人は抽象と具象のあいだを行ったり来たりします。抽象と具象が反対であるというのは言葉の綾であり、それこそまさに抽象だと言えるでしょう。抽象と具象はグラデーションをなして重なりあっているような気がします。または、プリズムやホログラムのように見る角度や位置によって異なって見えるものなのかもしれません。

いずれにせよ、「見える」なのです。「である」ではありません。「である」とは人が夢に見るものでしかありません。

グラデーション、プリズム、ホログラムといった比喩という名の言葉の綾でしか、事物や現象をとらえられないという意味で、人は抽象という具象、具象という抽象を、一刻一刻行き来しながら生きている気がします。この場合に、変わり移ろうのは人なのです。

面影もまた人とともに、抽象と具象のあいだを行ったり来たりしているのでしょう。なにしろ影ですから。人がいなくなれば、面影もいなくなることを私は忘れたくありません。

トイブールドルに勘亭流は似合わない

＊

犬関連のInstagramのアカウントを見ていると、マグカップやTシャツやエサ用の皿に、犬の名前や生年月日だけでなく、顔や姿を印刷して販売するサービスの広告が目につきます。愛犬の画像を送れば、それをCGか何かを利用して商品に印刷するみたいです。

いま飼っている犬だけでなく、お別れした犬の顔を印刷した日用品を持つことで、追憶にふけったり面影をしのぶ人もいないのでしょうか。とはいえ、愛犬の顔や姿を印刷した商品が送られてきてクレームが付く場合も考えられます。

「似ていない」とか「違う」という苦情です。視覚的なイメージはきわめて個人的なものであり、愛着が強いほど容姿が「似ている」かどうかをめぐる判断はことさら詳細をきわめるものとなるにちがいません。

名前や生年月日ではこうした苦情は起こりません。愛する犬の名前に文字に誤記がない限り、あるいは生年月日の数字に間違いがない限り、「これは違う」「返品します」「作り直してください」というクレームは生じないでしょう。

マグカップやTシャツやエサ用の皿に印刷された名前は文字であり、生年月日は数字だからです。詳しくいうと、文字と数字の抽象的な面を利用しているからです。

抽象ですから、文字や数字は複製（コピー）が可能で、愛犬家向けの複数の商品にどんどん印刷すれば、愛犬家は歓喜するでしょう。

「これは〇〇ちゃんの顔と名前と生年月日の入った鉛筆でしょ、あれはノートでしょ、むこうにあるのはマイバッグで、友達に贈ったら大好評で大喜びされたわ。今度は風呂敷を注文するつもり」

＊

文字や数字は抽象だから「同じ」や「同一」を容易に、しかも大量に複製できる。一方、視覚的なイメージは具象なので「似ている」かどうかをじゅうぶんに注意したうえで複製しないと「似ていない」とか「ぜんぜん違う」という苦情を招く。

そんなふうに、かんたんにまとめることができそうです。

でも、抽象と具象というのは、それぞれが別個に存在するわけではなく、人がどう見るかによって左右されるし、そもそも抽象と具象は重なりあったり、グラデーションであるらしい。

こんなふうにも考えられます。ややこしそうですね。じっさい、ややこしいみたいなのです。

たとえば、以下のような話が考えられます。

「あんたねえ、愛犬の名前と生年月日は文字と数字であり抽象だから、それをTシャツに印刷すれば正確に伝わるし、複製もかんたんにできるし、愛犬の顔や姿というイメージとか印象と違って、「似ていない」とか「ぜんぜん違う」といったクレームはつかないなんて言ってたけど、うちの商品に苦情が来て返品があったのよ。こんな可愛くない文字は、うちの子にはぜんぜん似合わないとか言ってさ」

＊

はいはい、そうですね。おっしゃるとおりです。大変でしたね。ご苦労さまでした——私としては、そう返事をするしかありません。

作り話とそれに対するひとり返事はさておき、抽象とはほんとうに分かりにくいものです。いまのTシャツの例ですが、フォントや活字という文字の形についてのイメージが問題になっています。

たとえ文字や数字であっても、その抽象的な側面だけが伝わるわけでは必ずしもなく、形というイメージ（像）についてのイメージ（印象）がつきまとうのは避けられないのです。

純粋な抽象も生粋の具象もありえないという意味です。

数字も言葉も、文字としての形と、発音された音声は抽象になりえますが、それが人に受け取られる、つまり人の内に入ったとたんに、その人独自の意味とイメージがまどわりつくことを忘れてはなりません。

だから通じないや伝わらないや誤解されたなど、すったもんだが起こるのです。

これが顔や姿であれば「似ていない」というわかりやすいクレームになるのですが、名前を記すのにつかわれた文字のフォントや、生年月日を表す数字のフォントが、あの子には「似合わない」「似つかわしくない」という繊細かつ微妙な反応もありうるし、そうしたクレームをする気持ちもまたよく分かる気がします。

愛しているからです。愛は、しばしば具象として立ちあらわれます。たとえば、細部への過剰ともいえるこだわりがそうです。

*

愛しているものに対して、人は繊細かつ微妙な反応を示します。イメージや印象を支えるものは、きわめて個人的な感情だからです。その感情は細部に具体的に立ちあらわれますから、抽象度はきわめて低く、ほぼ具象と言っていいと思います。

漠然と曖昧に愛するなんて、人にはできません。抽象的に愛することも無理だと考えられます。目に見えて触れられるものしか愛せないのです。愛する対象が目の前になくてもかまいません。

写真一枚でも、名前であってもいいのです。目で撫で（視覚）、舌で転がせれば（言葉）、それは愛の対象の代理になります。そもそも人が愛しているのは代理なのであり、その代理は思いの中に具体的な形で、つまり具象として存在するのです。

(フェティシズムなんていう抽象的な言葉に置きかえて、まとめないでくださいね。分かった気持ちになったところで、その感情は愛とはぜんぜん関係ありません。)

ところで、あなたは、愛しているもの(人でもかまいません)をどれくらい目の前で見たり触ったことがありますか? いまはどうですか? そのものや人が目の前にいますか? いなくても愛しているのではないのでしょうか。

愛おしくてたまらないものは、つねに目の前にあったりいたりするわけではないのです。つねに(い)ないほうが普通なのです。でも愛している気持ちに変わりはないと思います。ここで言っている愛とか具象とはそういう意味です。

*

たしかに明朝体と丸ゴシックと角ゴシックとでは、その文字と数字の印象ががらりと変わりますね。

個人的なイメージでは、洋犬であるトイプードルの名前を記すには明朝体や勘亭流の字体は似合わない気がします。フレンチブルドッグなら別ですけど。お分かりいただけますか?

ワンコに興味がない人には「はあ?」という感じではないのでしょうか。このようにイメージというものはきわめて個人的なものであるために、それをひとさまに披露した場合には、受けるかどうかの保証はありません。

偶然性に左右される賭けであり、その意味で、受けるかスベるか瀬戸際につねに立たされている駄洒落やギャグと同じなのです。

——洋犬であるトイプードルの名前を記すには明朝体や勘亭流の字体は似合わない気がします。フレンチブルドッグなら別ですけど。

ここの意味がお分かりになりましたか?

＊

こうした「似合う」「似合わない」という判断の根底には、やはり愛犬である「あの子の姿」というイメージがあるのでしょう。そのイメージと、フォントという文字の形と顔（文字にも顔があります）のイメージが、合っているか合っていないかという話になるわけです。

文字をめぐる、抽象とは異なるレベルでの判断が働いているといえます。

抽象と具象は豹変しあうなんて言い方もできるでしょうが、そうした表現は言葉の綾、つまりレトリックでしかありえません。何とでも言えるという意味です。そもそも、豹変するのは人のほうなんですから。いまの言葉の綾です。

抽象と具象をめぐるのは、言葉の綾を編むしかなさそうです。

象さんの話

＊

「存在とは何か?」「存在とは何であるか?」「存在って何?」「ある」とは何か?」「あるとは何か?」「あるとはどういうことであるのか?」「ある」とは何であるのか?」「ある」とは何で「ある」のか?」

以上の言い方を、ぜんぶ同じことを言っているととらえるのが、抽象なのだろうと思います。普遍を目指しているからです。異なって見えることを同じだと言い切るためには、体感を裏切るわけですから、それ相応の覚悟が必要です。覚悟とはしばしば感情的なものです。

同じであるはずだ。普遍というものがあるはず。誰にでも通じることがあるはず。誰にも等しく分かることがないわけがない。こういうのは、信念です。思いこみです。意思であり意志であり意地なのです。

石にも意志や意地があるなんて言うと、そういう意志と意地をもった人はたいてい腹を立てます。石頭と言われていると勘違いするのかもしれませんが。そういう人は頭の回転がはやいのですから。

融通がきかないのかもしれませんが。純粹と言えば純粹。単純と言えば単純。抽象や普遍や客観を指向し嗜好する人は、石のように硬く強い意志と意地をそなえているように見えます。要するに、怖いのです。なぜ怖いのかと言えば、切り捨てないかぎり、抽象や普遍や客観はありえないからです。

そんな感じですから、冒頭で並べた八つの問いの答えは「一つしかない」なんて、抽象を指向する人は言うかもしれませんが。普遍や客観を指向する人はたくさんいるし、人それぞれですから、それぞれが「オンリーワン」の答えを用意するでしょう。

一つだけという点が共通して、それぞれがばらばらという意味です。各自が「一つ」を勝手に決めているだけですから、当然のことながらそうなります。

もうお分かりいただけたと思いますが、抽象において大切なのは「一つだけ」にしぼり、その単一性に過剰なほどこだわるという点です。真理や事実や解答や解釈が「一つ以上」あっては困るわけです。事物や現象が見方によって変わるという見方ができないのです。とぼけている可能性もあります。これは感情および気質の問題だと思われます。

次のようにも言えるでしょう。

「存在と無」と「L'Être et le néant」と「あるとない」の違いがあたかも無いかのような顔をして語る人がいれば、それは抽象的な思考をしている、または自分のしているのが思考であって抽象的な思考だとはぜんぜん考えていないにちがひありません。勉強がよくできて頭がいいと言われている人に多い気がします。

＊

上の八つの問いをながめて考えこむ人もいるでしょう。「あほらし」と言って無視する人もいるでしょう。それぞれの違いについて検討する人もいるでしょう。それぞれの「ずれ」を楽しむ人もいるでしょう。人それぞれです。

たとえば、「存在とは何か?」「ある」とは何で「ある」のか?」のあいだの「ずれ」をああでもないこうでもないと考えながら、お茶をすする人もいます。げんに、ここにいます。

「存在とは何か?」「ある」とは何で「ある」のか?」の答えを考えているのではありません。答えなど出ないと思っているらしいのです。その二つの問いという言葉の字面を、ただひたすらながめているのです。両者の「ずれ」を楽しんでいるようにも見えます。

ささいなずれや細部が気になってならないのでしょう。融通がきかないのかもしれませんが。純粹と言えど純粹。単純と言えど単純。これは感情および気質の問題だと思われます。

言葉の顔、つまり表面に過剰にこだわるのです。その人は、そういうふう言葉の表面や表情にこだわるのが具象だと思いこんでいる節があります。ほんとうのところは分かりません。

そもそも、その人は「ほんとう」なんてない、と考えているようなのです。そういうひとつの「見方」をしているということですね。というか、見方が猫の目のように変わります。決められませんから、優柔不断でとりとめがなく、なにしろ面倒くさいです。

*

抽象、具象、事象、現象、表象、仮象、印象。

こんなふう、言葉を並べてわくわくする人がいます。ここにもいます。辞書や事典で調べたり、ネット検索をする気配はありません。ただながめて、にやにやしたり、うーむとうなってみたり、鼻をほじったり、たまに天井の模様に見入っていたりしています。

言葉の意味を調べるよりも、字面をながめて、「ああでもないこうでもない」をするが好きようです。そうやって考えたことを、noteの記事にしたりします。

あと本を手にしても、読んでいるというよりも、見えています。病弱だということもありますが、通院以外に外に出ることはめったになく、とくにすることがないみたいです。家事をするほかは、たいてい一日中ぼーっとしています。

*

抽象、具象、現象、言象、幻象、限界。

後半が、なんだかあやういですね。現象まではよく見かけるのですが、それに続くものは何ですか？ 上の言葉を並べた人は、「げん界」とか称して、ぜんぶで十個の「げん」についての記事を書いたことがあるらしいのです。

現界、言界、幻界、限界……。

理解不能です。限界ですわ。自分語には付きあいきれまへん。

冗談はさておき、漢字の造語力は大了もので、漢字を組みあわせることで簡単に言葉が造れます。明治維新後の日本は、漢字の造語力に助けられて翻訳語をどんどん造って日本語を豊かにしていったそうです。最近、カタカナ語と略語がトレンドみたいです。シーニュ、エクリチュール、ディスタンス、サステナブル、SDGs、AKB48.....。

大和言葉だと、そう簡単にはいきません。せいぜい「見える化」くらいの迫力のなさ。漢字はいかにも厳めしい顔をしています。「視覚化」のほうが、もっともらしいですね。

無いものを有るように見せる力があります。

真理、普遍、哲学、詩、愛、民主主義.....。こういった漢字を見ていると、わくわくしてきませんか？ 元気が出てきませんか？ 文字にパワーがあるのです。顔芸とも言います。

文字には顔があります。顔が命と言ってもかまいません。たいてい、それでみんなイチコロになります。意味や理屈よりもイメージや気分だと言えば、お分かりいただけるでしょうか。イメージや気分は日常生活をいとなむさいには、とても大切です。

＊

真理、普遍、哲学、詩、愛、民主主義.....。無いものも有るように見えてくるから不思議ですね。そもそも言葉は人がつくったものであり、「これをつかいますよ」と決めたものです。辞書に載っている語義や意味や理屈や個人がいただくイメージは後に来たもの、つまり後付けだという意味です。

かといって、いちいち話すために辞書を持ち歩く人は見たことがありません。そんなことをしては日常生活はおくれません。誰もがやることがいっぱいあって忙しいのです。

辞書や意味や理屈が最初にあったわけではぜんぜんないわけです。「無いものも有るように見えてくる」とはそれくらいの意味だと思ってください。意味不明なものを意味不明なままにつかうのが人なのです。面倒だし忙しいからでしょう。意味不明なものとは言葉のことです。

「ほんとうに有るか無いか」なんて分かるわけがありません。そんな高尚な話はここではしていません。無いものねだりはなさらないでくださいね。内容なんてないよーです。意味不明なものを意味不明なままにつかっているだけです。

＊

原象、眼象、弦象、減象、絃象。

漢字の造語力はすごいです。そんなものが有るように見えてくるから、不思議です。上の例はひとりで勝手につくっただけで、内実というか内容は無いようですから、造語力の「やってる感」だけとか、「やってる感」の空回りみたいなものと言えばいいのでしょうか。

でも、こういうことを本気でする人がいるのです。げんに、ここにもいます。「げん界」、つまり現界、言界、幻界……という感じで感字をしているという話です。ご丁寧に、それなりに理屈というか説明もしているのですから、ご苦労なことです。

抽象や具象や現象や表象の「象」とは、「像」と同じく「かたち・かた・すがた・ありかた・ありよう」のことらしいです。言葉（文字）を、人は「かたち」として、何かに描いたり書いたり、あるいは、各人の思いの中で「えがく」のだろうと想像できます。

意味不明なままです。ここがポイントです。意味は宙づりにされたまま、空（くう）に「えがく」のです。形だけ。なぞるに似ています。なぞにも似ています。いや、そっくりと言うべきでしょうか。

個人的には、ぜんぶ印象とか心象でまとめた気持ちになりますが、これこそが一本化指向の抽象なのでしょう。人は抽象という操作なしに認識も思考もできないようです。いま述べた個人的な感想を一般論をよそおって、「人は……」なんて、まとめるのも抽象にほかなりません。

＊

切りがないわけです。こういう切りのないことに血道を上げるのがヒトのようです。もっと知りたい、もっと分かりたい、もっと欲しい、のでしょうね。もっともったのエスカレーション。これを「欲望の空転化現象」と漢字で造語すると、もっともらしいし迫力がありませんか？ もっと分かるはずだ、もっと手に入るはずだ、生き物の頂点だもの、霊長類のトップだもの。

2000年問題に打ち勝ったんだぞ、仲間を月に送ったんだよ、地球の気温を上げたのよ。なにしろ、お鼻だけは高いのです。

かりに、抽象、具象、事象、現象、表象、仮象、印象のほかにも、言象、幻象、限象……があったとしても、そういう抽象的なものをこしらえて、ああでもないこうでもないと言うのは、例のゾウさんをめぐっての話に似ている気がします。

複数の人が一頭の象さんの部分に触れて「象とは○○のようなものだ」と語るという例の話です。お鼻だけはやたらに高いが、お鼻の長い象さんにはけっしてたどり着けない。

森羅万象——シンラマンゾウとも読むそうですが、ナウマンゾウに似ていませんか？ ぜんぜん似てません——をとらえることはぜったいにできない。比喻や駄洒落どころではない気がしてきました。

意味不明なままです。ここがポイントです。意味は宙づりにされたまま、空（くう）に「えがく」のです。形だけ。なぞるに似ています。なぞにも似ています。いや、そっくりと言うべきでしょうか。

言葉の綾だけでなりたっている文章

＊

言葉は生きているという言葉の綾をあざ笑うかのように、生きていないのに死んだふりをする。そもそも生きていないものは死ねないはずなのに、死んだふりをしているのです。死んだふりのふりが空回りしているとも言えます。

ふりのふりがカラカラと回っている。まるで風車（かざぐるま）のように。まるで風車（ふうしゃ）のように。ヒッチコックの映画で、オランダで風車が複数回っている中で、ひとつだけが反対の回り方をしているシーンがあります。

＊

見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう。そこには属さない場違いな、つまり何の意味も持たない細部が加わったのである——。そんな意味のことを、スラヴォイ・ジジェクが語っています（『斜めから見る』スラヴォイ・ジジェク著、鈴木晶訳、青土社 pp.168-169）。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。これがジャック・ラカンについての私なりのまとめでもあります。

ふつう人はそれに気づきませんが、何らかの「異化」によって気づきます（または、思い出します）。その「異化」が、このヒッチコックの映画では「風車の一つが風向きと逆に回っている」であり、ジジェクに言わせると「シニフィエを伴わないこの「純粋な」シニフィアン」なわけです。

この「異化」に気づくのは、映画の主人公なのですが、さらには映画の観客の一人である、あなたも気づくことになり、その結果あなたもまた映画にまきこまれる——、ジジエクはそう指摘してもいます。

＊

「シニフィエを伴わないこの「純粋な」シニフィアン」というジジエクの言葉が気になります。「意味されるものをともなわない、意味するものが立ちあらわれる」とか「無意味な細部がくっきりとその姿をあらわす」と言い換えてみると、そのイメージにぞくぞくします。

無意味が「意味というもの」（意味が自明であり当たり前だと思ふ前提）を攪乱することも言えるでしょう。

意味を欠いたものがふいに姿を見せるという状況とはどんなものなのでしょう。ふつうは姿や形があるものが目の前に現れれば、それに意味や名前やストーリーがあると、人は考えます。

名のないものは不気味であり不安だからです。まして意味がないとなると、人は恐怖におちいります。

名前が分からなければ、名づけないままにそれが何なのかを、これまでのさまざまな記憶をたどり照らしあわせて、それに似たものを探し、「あれに似ているもの」くらいの見当で受けとめるかもしれせん。

名付けは意味付けとかなり近いと考えられます。

のっぺらぼう、つまり名前がなく意味がないものとは出会えないのが、人における「見る」であり「出会い」だと思われまふ。無意識のうちに、名付けたり意味付けをしてしまうのです。

さもなければ、見えないし出会えないと言えます。

＊

レトリックだけでなりたっているような文章を書きたいと思う時があります。

内容なんて無い様なもので、物と事の有り様がきわだつ。ただ言葉の形と模様と動きだけがきわだつ文章。そんな文章は「ありえない文章」と言うべきでしょう。

言い訳をさせていただくなら、あくまでもイメージと夢——それもありえない夢——を語っているのです。

こういうありえない夢があるかぎり書きつづけることができるのだとすれば、この夢が終わらないでほしいです。この夢の中で、ありえない文章をひたすら書くしかない。

必死にかく、もがき、あがくのです。書いても書いても「欠く」しかない世界。圧倒的に言葉は足りないし、見る果てがないし、切るにも切りがないし、分けても分らない。それが「欠く」しかない「書く」であり、「ありえない」文章の綾、言葉の綾なのです。

たとえば、たったいま書いた文章はレトリックだけでなりたっている書き方をめざして書きました。書かれていても何も言っていないのです。ひとり受けギャグの世界に似ていませんか？　じっさい、そうなのでしょう。

また、この書き方には外国語に翻訳するのがきわめて難しいという特徴があります。翻訳する人などいませんけど。

翻訳できない、つまり他の言語に置きかえられないとすれば、何かが書かれていても、じっさいには何も書かれていないからでしょう。書いても書いても欠いているだけ、書いても書いても掻いているだけ、書いても書いても藻掻き足掻いているだけ、だからです。

何も書かれていないものを別の言語にうつせるわけがありません。

抽象的、普遍的、客観的思考の埒外にあるとも言えそうです。翻訳とは、置きかえとは、抽象的な思考や操作——切り捨てた結果としての置き換え——が可能な場でこそ、実践されるのですから。

そもそも、言葉の綾（レトリック）では、綾（模様・姿・かたち）そのものが命ですから、切り捨てるものがないのです。言い換える（置き換える）こともできません。つまり、翻訳ができないという意味です。

うつす、写す、映す、移すためには、体（たい）を成していなければなりません。

体とは体裁、つまり「外から見える、かたちやありさま」なのですが、かたちだけ、さまだけで、なかみがないとなると、ある言語では「かたちやありさま」があるように見えても、別の言語に置きかえようとしたとたんに、「なかみ」が「から」だとバレてしまうという事態が生じます。

その言語だけで見ていると、なかみのないのが分かりにくいのです。

＊

のっぺらぼう、つまり名前も意味もストーリーもないものとは出会えないことは分かっています。でも、夢に見ることならできるのではないのでしょうか。夢の中で、人は正気ではないと考えられます。

常軌を逸している、荒唐無稽、とりとめがない、ありえない、それでいてすべてが肯定されている——これが夢ではないのでしょうか。夢ではすべてが肯定されて否定がない（じつは現実もそうなのかもしれませんが、覚めた意識はそうした状況で抗うすべを知っています）、これは夢のきわめて大切な特徴です。

言葉の綾だけでなりたっている文章——書いてみたいです。そのためには夢の中に降りていかなければならないのかもしれませんが。とはいっても、夢の中での出来事を言葉にしたところで、それは言葉の世界になります。

夢には夢の文法があるように、言葉には言葉の文法があるはずですが。言葉には言葉の文法があるように、夢には夢の文法があるはず、ではなく。そうです。ここでは本末転倒な話をしているのです。さかしまとか、あべこべの世界なのです。

言葉は生きているという言葉の綾をあざ笑うかのように、生きていないのに死んだふりをする。そもそも生きていないものは死ねないはずなのに、死んだふりをしている。死んだふりのふりが空回りしている。

たとえば、いま上で書いたようなありえないさまが、言葉におけるのっぺらぼうのひとつの身振りなのではないかと思っています。そんな倒錯した身振りをしているのが言葉なのです。

ただし、その倒錯には人はふつう気づきません。見えているのに見えないからです。見えているのに見ていないからです。読む以前の話なのです。だから、言葉を見ることが大切です（もちろん、こんなことにこだわる必然も必要もふつうはありません、日常生活を送るさいには、むしろ害となります、ここでしているのは文学の話なのです、おそらく哲学の話でもないでしょう）。

言葉は生きていないのに生きたふりをするどころか、死んだふりをしているのです。ふりのふりがカラカラと回っている。まるで風車（かざぐるま）のように。

＊

朝の連続ドラマを見ていて、思わず引きこまれている自分に気づき、苦笑することがあります。テレビドラマにせよ、映画にせよ、演劇にせよ、振りをする身振りが基本にあるわけですが、連続ドラマはととても分かりやすく、すっと入っていき、自分もその「振り」を容易に「なぞる」ことができます。

振りをするが基本のお芝居では、俳優が配役を演じています。当たり前なのですが、これはとても興味深いことだと思います。誰もがそれが「演技」つまり「振りをしている」と知っているのにそれを一時的に忘れるのですから。

それが現実のように思いこんでいるわけです。心の隅で、これは演技なのだと分かっている、楽しむためにはその野暮な考えを捨てなければなりません。

振りだけがある世界。配役がどんどん変わる。既視感の連続。何かに運ばれていく快

感。同じ身振りが繰り返され。似た光景が現われて消えていく。仮面が演じる。仮面が踊る。仮面の素顔が刻々と変化する。動きと表情だけがあるマスカレード。

そこには意味やドラマやストーリーやイメージがあるのですが、見る人がそうしたものを忘れる瞬間や持続したときがあるように思えてなりません。意味を失った「純粹な」振りが仮面とともに演じられている世界——。

たとえば、テレビのドラマを見ていても、そこに振りだけが回っているさまを見ることが出来る気がします。そうしたさまを見せるのは見方なのかもしれません。演技での役者による身振りというよりも、演技を見る者が、演じられた振りにどう触れ、どう振れるかなののかもしれません。

要するに、見る側の問題。言葉であれば、読む側の問題。となると、書きながら仕組んだり仕掛けることは無駄だということになりそうです。そうなのかもしれません。がっかりするのは欲深いからでしょう。

そもそも欲がない者が書くのでしょうか？ そう居直りたくなります。

「見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう」——そんな文章を書いてみたいです。

こうやって言葉の綾を織っていく。引用の織物をたばねて編んでいく。いまはそれしかできそうもない気がします。それでいいのだと言い聞かせています。

抽象の具象性、具象の抽象性

＊

お風呂場のタイルに一本の毛が落ちています。それをモノクロの写真に撮ります。その写真を誰かに見せます。白黒の写真で見る一本の毛は、一本の線に見えます。直線ではなく、ややカーブした黒い線が白の背景の中で伸びている。そんなふうに見えます。

「これは〇〇っていうアメリカの現代美術の作家が撮った作品で、タイトルは『作品番号2032』っていうんだ」

「ほーっ」、「なるほど」、「やっぱりすごいね」、「で?」、「あほらし」、「いやだあ///」、「……」、「冗談はよしこさん」

さまざまな反応があると想像できます。

＊

お風呂場のタイルに五十四本の毛がからまって落ちています。それをモノクロの写真に撮ります。その写真を誰かに見せます。白黒の写真で見る五十四本のからまった毛を想像してみてください。写真だと毛だとは分からないかもしれません。白い背景の中で複雑にからみあった黒い線は描いたようにも見えます。いろいろな形や物に見えるでしょう。

「これは〇〇っていうアメリカの現代美術の作家が撮った作品で、タイトルは『作品番号2033』っていうんだ」

「ほーっ」、「なるほど」、「やっぱりすごいね」、「で?」、「あほらし」、「いやだあ///」、「——」、「冗談は顔だけにしてくれる?」、「マリモ?」

さまざまな反応があると想像できます。

有名は有数、無名は無数

＊

”水が来た。”

「これは森鷗外作『寒山拾得』から引用したもので、三島由紀夫の『文章読本』で激賞されている文なんだ」

「そうかそうか、さすがに名文だね。短いけど、すごい。なんというか、こう、気品が漂ってくるのよね」、「やっぱりね。違いますよ。短いけど、そんじょそこの文章とはぜんぜん違う。なんというか、こう、文体が違います」、「分かります。そんな気がしたんだよな。言葉に独特のたたずまいがあるでしょ？　なんというか、こう、匂い立つ教養を感じるんだ」

その他、さまざまな反応があると想像できます。

＊

「ねえねえ、お父さん、お隣の〇〇くんが作文でこんな文を書いたのよ」

「なににに。『水が来た。』？　ふーん」

その他、さまざまな反応があると想像できます。

＊

「ねえねえ、お義父さん、うちの〇〇ちゃんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？　おおお！　あの子は天才だ！」

その他、さまざまな反応があると想像できます。

＊

「ねえねえ、〇〇さんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？ ——」

〇〇にお好きな名前を入れてみてください。「——」に想像できる反応の言葉や感動詞や約物を当てはめてみてください。〇〇が有名か無名かでリアクション（評価ではなく）は異なるにちがいません。

＊

有名は有数、無名は無数。

有数の有名、つまりたくさんあるわけではない有名な名前の力はきわめて強大であり、無数にある無名、つまり星の数ほどある無名の名前が束になって掛かってもかなわないのです。

たとえば、無名の人の小説は売れません。ところが「〇〇賞受賞」（「〇〇賞候補作」や「△△さん絶賛！」でもかまいません）というふうには、有名な賞の名前や有名人の名前とセットになると、手のひらを返したように人は買うし読みます。

あと、無名の人のエッセイは読まれません、有名人のエッセイは読めます（巧拙に関係なくです）。雑誌や新聞で連載されたエッセイが溜まってエッセイ集を出せば、これまた売れるのはみなさんご存じのとおりです。

「名前を買う」とか「名前を読む」とは言いませんが、「名前を買う」「名前を読む」のは事実だと思います。じつは私も名前を買ったり読んでいます。根がミーハーなのです。

＊

名前は最小最短最軽の引用です。なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。小さくて短くて軽いくせに、どうして最強なのかと言うと、放つ光が半端じゃなくまぶしいからです。

ある文章に人名や作品名があるだけでそこに光がさして、他の部分が見えなくなって読まない人も多数いるくらいです。ある文章を読んだには読んだけどそこに書かれていた名前だけが記憶に残っている。そんな文章は意外に多いと感じます。

冗談はさておき、短いセンテンスについて、あれこれ書くのはフェアではありません。参考のために、以下の引用をご覧ください。

私は、森鷗外『寒山拾得』の中にある「水が来た。」は名文だと思います。句点を含めて五字からなる、この簡潔な文を意識して書いたことが何度もあるくらいです。

”（前略）この文章はまったく漢文的教養の上に成り立った、簡潔で清浄な文章でなんの修飾也没有。私がなかならず感心するのが、「水が来た」という一句であります。この「水が来た」という一句は、全く漢文と同じ手法で「水来ル」というような表現と同じことである。しかし鷗外の文章のほんとうの味はこういうところにあるので、これが一般の時代物作家であると、間が小女に命じて汲みたての水を鉢に入れてこいと命ずる。その水がくるところで、決して「水が来た」とは書かない。まして文学的素人にはこういう文章は書けない。このような現実を残酷なほど冷静に裁断して、よけいなものをぜんぶ剥ぎ取り、しかもいかにも効果的に見せないで、効果を強く出すという文章は、鷗外独特のものであります。（後略）”

（三島由紀夫『文章読本』第三章小説の文章より引用）

”間が小女を呼んで、汲みたての水を鉢（はち）に入れて来いと命じた。水が来た。僧はそれを受け取って、胸に捧げて、じっと間を見つめた。清浄な水でもよければ、不潔な水でもいい、湯でも茶でもいいのである。不潔な水でなかったのは、間がためには勿怪（もっけ）の幸いであった。しばらく見つめているうちに、間は覚えぬ精神を僧の捧げている水に集注した。”

（森鷗外『寒山拾得』・青空文庫より引用、丸括弧内は引用者）

＊

この文章を読んで数十分後に考えてみてください。

「何が記憶に残りましたか？」

名前、とくに人名だけでなければいいのですが。

＊

文章のなかでは広く知られた名前ほどまばゆい光を放つ文字はない。文章のなかでは
広く知られた名前ほど記憶に残る文字はない。今回は、そんな話をしました。

有名は無数、無名は有数

＊

有名は有数、無名は無数。

有数の有名、つまりたくさんあるわけではない有名な名前の力はきわめて強大であり、無数にある無名、つまり星の数ほどある無名の名前が束になって掛かってもかなわないのです。

(拙文「有名は有数、無名は無数」より)

＊

前回の記事のタイトルは「有名は有数、無名は無数」でしたが、今回は「有名は無数、無名は有数」というお話をします。

「有名は有数、無名は無数」と「有名は無数、無名は有数」——実は同じことなのです。

＊

現在では、美術や音楽や文学の鑑賞が複製の鑑賞である場合が多いことは注目してもいい事実だと思われまます。

美術においては、作品が有名なものであるほど、実物よりも複製を鑑賞していることは分かりやすいですが、音楽であれば生の演奏よりも放送やDVDやCDというかたちでの複製を鑑賞していることを意識することはあまりない気がします。

文学の場合には生原稿を読む人は稀でしょうから、印刷物あるいは電子書籍やネット上でという意味での複製を読んでいるのがほとんどだと言えます。とくにパソコンのワープロソフトでの執筆が主流になっている現在ではどれが生原稿なのかがきわめて曖昧になります。

＊

絵を例に取ってみます。世界で最も有名な絵画はモナ・リザだと言われますが、あなたはモナ・リザという絵を見たことがありますか？

モナ・リザの現物を見たことがある人よりも、その複製を見たことのある人のほうが圧倒的に多いでしょう。「実物対複製」と単純に考えがちですが、実物はたったひとつであるのに対し、複製は複数あるいは無数にあります。作者および作品が有名であればあるほどです。

有名は無数、無名は有数か、たったひとつなのです。作者や作品が無名だと誰も好き好んで複製してくれないという意味です。自分でせつせと複製をつくれれば別ですけど。私みたいに。

＊

複製というものについて考えてみましょう。さらには、複製の複数性、複製の無数性、複製の多様性についても考えてみましょう。

複製という同じものがたくさんあるイメージを持ちますが、複製とは一様ではなく、さまざまなずれをともなって存在しています。あなたの見たモナ・リザと私の見たモナ・リザはきっと別物でしょう。あなたの見た複製と私の見た複製は別物だという意味です。

別物である複製――。

不思議な気がしないでもありませんが、絵画は有名であるほどたくさん複製され、その複製を見る人も多くなりますから、あなたと私が別物の複製であるモナ・リザを鑑賞した可能性が高いのは当然でしょう。

一方、作者や作品が有名ではないほど、展示会などで実物を見る人がいて、その数は少ないでしょうから、あなたの見た〇〇という絵と、私の見た〇〇という絵が同じ（同一）である、つまり実物である可能性は高くなりそうです。

このように複製のありようと、実物や本物のありようは、理屈では分かるのですが、現

象としてぴんと来ません。私なんか不思議な気がしてなりません。

*

楽曲の複製であるレコードや DVD や CD やその放送やネット上での配信でも、複製は多様をきわめています。それぞれが、音源の違いによって、または媒体の形式によって、あるいは複製が提供される時と場合によって、微妙にあるいは大きく異なって感じられるという意味です。

文学作品でも、多種多様なかたち（雑誌での掲載、単行本、文庫本、電子書籍、翻訳）での複製での読書がおこなわれています。私の場合には、小説の読書で活字やフォントやレイアウトが変わると別の作品に感じられることがあります。翻訳書とその原著も、私にとっては「似ている」けど別物です。

楽曲も文学作品も、鑑賞イコール複数の複製の鑑賞だと実感しないではいられません。

*

話を美術作品に戻します。

モナ・リザの複製はたくさんの画集や美術書に収録されていますが、それを虫眼鏡で見くらべるとずいぶん差があるのに気づきます。図書館で試してみるといいでしょう。撮影や印刷によってかなりずれがあるのです。私が見た美術書にはモナ・リザを写したモノクロの写真がありましたが、ぜんぜん違います。

インターネット上でもモナ・リザを鑑賞できますが、印刷物として見るのとはやはり違って感じられます。「これはモナ・リザなんだ」と言葉で自分に言い聞かせて決めつけて、頭というか観念で見ると「同じ」でしょうが、「似ている」あるいは「そっくり」なだけです。でも、ふつうは「似ている」とか「そっくり」というふうに見ません。興ざめするからです。

自力では——拡大鏡や拡大装置なしという意味です——「同じ」「同一」なのか「そっくり」なのかを確認も検証もできない自分の非力を、人はふつう認めたくありません。人間（ホモ・サピエンス）としてのプライドが許さないからかもしれません。

＊

ところで、「同じ」というか「同一」と言ってもいい、モナ・リザの鑑賞法があります。名前を鑑賞するのです。名前という言葉を見るのです。「モナ・リザ」という作品名のことです。固有名詞、なかでも書かれた文字としての名前は最強の複製であり、「似ている」どころかまったく「同じ」なのです。

名前と名詞の力は強いです。人は名前と名詞にころりと参ります。「モナ・リザね、レオナルド・ダ・ビンチ作ですよ、名画ですよ、美しいとか素晴らしいとか感動したって言わないと笑われますよね」という感じです。

名前は楽々複製ができます。いとも簡単に引用もできます。モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ……という具合に。

＊

冗談はさておき、「固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用である」ことは注目していい事実だと思います。

ただし、モナ・リザ、Mona Lisa、La Gioconda、La Joconde、蒙娜丽莎、蒙娜丽莎、……というバリエーションもあることを忘れてはならないでしょう。

固有名詞の引用がきわめて簡単で楽だとはいえ、「モナ・リザ」だけが「モナ・リザ」ではないという意味です。世界という場では、意外とややこしいのです。

＊

いずれにせよ、名前の力は強大です。

名前の力が強大なのは絵画に限りません。音楽、スポーツ、料理、製品、映画、放送、お芝居、小説、文書、画像、動画——どんなジャンルや媒体でもそうですね。

小説で考えてみましょう。小説は名前とキャッチフレーズで読むもので、作品で読むものではありません。

「〇〇作のXXですね、文豪（△△賞作家）ですね、〇X△%&（本の帯や解説や評判で読んだフレーズが入ります）ですね、とりあえず感動したって言うておきましょうか、いや難解でしたがいいかも、読んでいない（さっぱり分からなかった・つまらなかった）ことがばれないように気をつけよう」という感じです。

名前と文言を引用するだけで事足ります。固有名詞（とくに人名）とキャッチフレーズは最強で最小最短最軽の引用だと痛感します。

おふざけと憎まれ口はここまでにして、まとめます。

有名とは名前が無数に複製され引用されることであり、有名無実という言い回しがありますが、名をあげるものが必ずしも実とは関係がないままに権威につながることはよく見受けられます。いずれにせよ、有名とは無数、無名とは有数またはたった一つの実物であるということですね。

有名は無数、無名は有数。

*

ところで、たったひとつの実物って潔くて格好よくないですか？ もちろん、無名の話です。

ひっそりと たったひとつの ほんまもん

指が知っている、体が覚えている

＊

ゲームやマージャンやパチンコをしている夢を見ると聞いたことがあります。夢の中で手や指が動くとも聞き驚きました。三つともやらない私は、そのときには、なんだか滑稽な話だと思いました。

先日、夢から覚めた瞬間に、夢で文章を書いていたさっきまでの自分の気配があり、それがキーボードを操作する仕草の余韻とともに思いだされたので、「へえー、おもしろい」なんて他人事のように感じました。

夢の記憶が体感となって残っている気がして感心したのですが、夢でキーを叩いている自分を想像すると、夢の中のパチンコ同様に滑稽でなりません。

何かに夢中になっている人って、端で見ていると微笑ましいし可愛くありませんか？
夢の中の自分は、ほぼ他人です。

＊

夢の中の出来事は絵として、つまり視覚的に思いだされると思いこんでいたのですが、指の動きや体感としても想起されるようです。

体感といえばふつうは五感ですから、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚として夢を思いだすとか、夢の中でそうした知覚が働くことはありえる気がします。

よーし、匂いのする夢を今夜見てみよう。そんなわけにはいきそうもないし、夢のことはたいてい忘れてしまい、覚えてない夢のほうが多そうなので、検証は難しそうですけど。

そもそも夢を検証するなんて、やっていけないことにも思えてきます。

＊

夢の記憶ではなく、現実起きた出来事の記憶の検証なら、やっていいでしょうね。げんにやっている人は多いです。

とくに興味があるのは、触覚の記憶です。これが自分の中ではいちばん「体感の記憶」っぽいのです。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

こう並べてみると、なんだかいやらしくも見えてきます。これは触覚ではないでしょ、と言われそうなものもありますが、お遊びなので大目に見てください。

大切なのは「〇〇する・〇〇される」というふうに、触覚には双方向性があることです。ほかの知覚にはありそうに思えません。触覚は相互的なものなのかもしれません。

そりゃあ、そうです。触ることは、何かに触れることでもあるわけですから。その何かは人であったり物であったり生き物であったりします。まさにふれあいですね。

世界と触れあうなんて、想像するとぞくっときます。このぞくっというのが触覚や触感への扉であり窓なのではないでしょうか。

＊

触感で思いましたが、食感とは、舌、歯、口蓋、唇といった場と外から入ってきたものとの触れあい、かかわりあいです。ある意味、エロチックです。

食べることと性愛はつながっている気がします。

たとえば、性愛は触れあいの極致です。体感、五感を総動員しての、必死な行為です。テレビで生き物の生態を記録した番組を見ていると、植物であれ、動物であれ、性愛や生殖にむかってまっしぐらという感じがします。

生殖は、子孫を残すためですね。それを広義のプレイ（遊戯・遊技、演技・演劇、演奏、競技）にまで高めているヒトはすごいと思います。

あそび、たわむれ、えんじて、かなでて、あらそい、きそう。

このプレイというのはどれもが、体感、五感を総動員しての行為です。スポーツがいちばんイメージしやすいと思います。競技の相手とだけでなく、世界との全身的な触れあいです。

プレイでは、「する」と「される」の区別が意味を失います。分けていてはプレイできない気がします。つまり、分けが分からない状態で臨み、いとなむのでしょうか。

いやらしく響いたら、ごめんなさい。

*

手が覚えているとか、指が覚えているとか、体が覚えているという言い方があります。これも取りようによっては、いやらしく聞こえませんか？ それは脇に置いて話を進めます。

車や機械の運転や操作は手や体で覚えているものだと思います。同じ車種や機種でも、違ったものをつかうと違和感を覚えます。まして別の車種や機種を操縦するとなると、慣れていない人は戸惑うのではないのでしょうか。

違和感が分かりやすいのは、やっぱり思いや気持ちよりも体感だと思います。体感は触感の王様みたいなものですから、「〇〇する・〇〇される」という双方向性と相互性がダイナミックかつダイレクトに感じられます。

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

まるで、相撲です。というか、格闘技やプレーヤー同士が触れあうスポーツでは、双方向性と相互性がダイレクトかつダイナミックに起こります。肉体同士が触れあうどころか、もろにぶつかり合うのですから。

*

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

言葉として読んでいるだけで体が火照ってきませんか？ 私なんか暗示にかかりやすいし、感情移入が激しいので、汗ばんできました。なにしろ単純なのです。

逆にいうと、格闘技とかを見るのが苦手です。顔をしかめながら見るタイプですから、やたら疲れてそのうち嫌になります。

最後まで見ることはめったにありません。あ、相撲は別です。すぐに終わっちゃいます。

*

車の運転や機械の操作では、手や指をつかうのがいちばん多い気がします。あ、足もつかう場合がありますが、手と足はそっくりじゃないですか？

いつだったか、パソコンで、あるサイトに入るときのパスワードを忘れて、思いだすのに苦労したことがあります。しばらくつかっていないサイトだったのです。

数字とアルファベットの組み合わせだったのですが、頭が覚えていなくて焦りました。

指が覚えていた、手が覚えていた、まさにそんな感じなのです。何度も何度も、キーボードに指を走らせているうちにサイトに入れることができ、「やった」と叫んだのですが、久しぶりに利用したサイトだったので、入ったとたんに忘れていました。

偶然に正しいパスワードを入力したみたいでした。パスワードはどこかに書いておくべきです。体感ばかりに頼るとひどい目にあいます。

*

体感の話が多いですが、私は体感派ではありません。むしろ体感は鈍いほうです。

どんくさくて鈍感だと小さいころから言われつづけて、いまに至ります。なにかと感度が悪いみたいです。

スポーツはぜんぶ駄目、演奏できる楽器はなし（だいいち楽譜が読めません）。でも、自分にそなわった体と体感は大切にしたいです。贅沢は言いません。

ただ体感がおもしろくて仕方ないので、話のネタにしているだけです。体感って、素直で単純だし、おもしろくありませんか？

そのうち飽きると思います。

*

いまだに天動説を信じています。

こどもの頃には太陽や月や星が動いていると信じて疑いませんでした。まして地球が丸いなんて思いも考えもしませんでした。

いまはどうかといえば、揺れています。その時の気分で地動説と天動説のあいだを行ったり来たりしているのです。

地球が丸くて太陽の周りをまわっているという話は学校で習って知っていますが、どうしても地動説が体感できません。

「体は正直だよ」ってやつです。この言い方も、状況しだいではいやらしく聞こえますか？

でも、知識や情報の力は大きいです。学習の恐ろしさというか。こんな私でも、いちおう世間体を気にしますし……。

そんなわけで、地動説と天動説のあいだでいまも揺れています。

＊

ここまで白状したので告白しますが、「太陽」のことを、ふだんは「お日さま」と言っています。

「地球」は「球」ですから丸いという感じがして、やっぱり違和を覚えます。

本当は「地面」とか「地べた」がいいのですが、語呂が悪いので「この星」とよく言います。星は好きな言葉です。

＊

指が覚えている、手が覚えている、足が覚えている、舌が覚えている、喉が覚えている、お腹が覚えている、皮膚（肌）が覚えている、体が覚えている。

覚えているだけでなく、考えているし、知らせたり、教えてもくれます。さとしてくれることさえ、あります。そんなことをしていると駄目だよ、と。

泣いたり、悲鳴を上げるのは、体調が悪かったり、病気になるとよく分かります。個人的な印象では、自分よりちょっと先に、泣くのです。

その差が「知らせる」なのでしょうか。体は心が準備する間（ま）を与えてくれるみたいです。助かります。

体感を裏切る発言や思考や行動をすると、体にもうしわけなく思う自分がいます。

体って意外と賢いんですよ。現在は体や体感が軽んじられ、ないがしろにされている時代だという気がします。

美容師さんから聞いた話なのですが、指がお客さんの頭の形を覚えているというのです。

店を変わって、別の店で初めて見るお客さんの頭をいじっていて、はっと思いだし、挨拶したそうです。

「〇〇さんですよ。お久しぶりです」

「あら、覚えていてくれたんですか？ よく分かったわね」

そのお客さんはちょっと不満げにそう言ったらしいのですが、じつは美容整形をしていたようなのです。

この話には感動しました。背後にそのお客さんのドラマを感じます。ちょっと細部を変えて、このエピソードを小説の中でつけたことがあります。

*

指が知っている、体が覚えている、体は正直だ、というお話でした。

言語活動はプレイなのです。

＊

”Lay it where Childhood’s dreams are twined”
—Alice’s Adventures in Wonderland by Lewis Carroll

生きていないはずの言葉が生きているかのように、さらには生きているふりを装いながら死んでいるふりをしているかのようにも、見える。生きているふりのふりと、死んだふりのふりが、空振りし空回りしている。そんなふうの人に言わせたいように見えなくもない言葉の身振り。

ふりのふりがカラカラとまわる。ふりだけが残る。振りだけがのこる。空回りの空（から）だけが回る。空（くう）だけが回る。まわるだけが回る。笑いだけを残して消える猫。チェシャ猫。知恵者ねこ。

＊

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なことを「無は無なり」「言葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。

がちで「ある」ように思えてしまうのです。いわば顔芸です。いつかは消えるはずの表情だけが「ある」のです。その存在感は無視できません。看過できないのです。

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていただけでしょうか？ 漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。

ただし、あくまでも日本語においての話です。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。母語である日本語をつかう私にとって、いま書いているような言葉の顔をめぐっての話は、じつにリアルな文章体験であり言語体験なのです。

＊

漢語はないことをあると思わせる（におわせる、ほのめかす、ふりをする）日本語における仕組みではないか、なんて思ってしまう。無い無い、無無なんていくら言っても、あるあると暗にほのめかしているのです。

理性理性と感情的に叫んだり、論理論理と支離滅裂に連呼するのと似ています。要するに、言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見るのですから、馬鹿を見たくなければ用心しなければなりません。

ちなみに私は鏡を見ると馬鹿が見えます。

言葉の世界と現実の世界は噛み合っていないとも言えるでしょう。まして一対一に対応しているはずもないのです。途方もなくズレているという意味です。そして、人はふつつそのズレには気づかないのです。

＊

「ない」を「ある」とほのめかしてしまい、それにやすやすと人が乗ってしまうほどの漢語の強面と媚態も、ややこしくてめんどくさいですが、こういうめんどくささは、漢語だけではなく、日本語におけるどんな言葉にも言えそうです。

「真摯に」が「テキトーに」であったり、「スピード感をもって」が「のろのろと」であったりするの、ご承知のとおりです。「分かった」が「分からない」、「承知しました」が「知るもんか」だなんて、当たり前ですね。

ある場面では、「だめよ、だめよ」が「いいわ、いいわ」、「ぜったいにいや」が「もっともっと」だったりもします。政治の世界がそうです。ビジネスの世界もそうでしょう。

めんどくさいですね。文字どおりに取れないのですから、きわめてM的な資質だと思わざるをえません。M的だというのは言葉だけではありません。その生みの親である人も、きわめてM的なのです。両者はともにMの世界に生きているのです。

言語活動はSMプレイ。プレイするのは言葉と人。「プレイ (play)」、ここが大切です。遊技であり競技であり演技なのです。

*

プレイでは、プレイだけが空回りします。プレイの主役は、じつはプレイヤーである言葉でも人でもありません。プレイのルールなのです。遊技のルール、競技のルール、演技のルールだとも言えます。

ルールを見たことがありますか？ 触ったことがありますか？ ルールは抽象的なもの、観念、概念、枠組みですから、誰も見たり触れたりできません。「ない」のです。でも、「ある」と人は認識しています。

ルールの親戚には、法律、法、規則、法則、真理などがあります。見たことがありますか？ 触ったことがありますか？

私は六法全書なら触ったことがあります。

法は「ない」から文字でわざわざ書いて「ある」のです。「決めた」だけです。書いてあるのは、人が忘れるからにほかなりません。

ないものはたいてい文字になっているので分かりやすいです。文字で書いてあるだけならば、それは「ない」と判断してもかまわないと思われれます。

「ない」のに人は「ある」と思いこみ、それにしたがうということは、人の世界ではよくあります。それを除いたら、人は人でなくなるほど、人的なものだと言えそうです。その意味では、言葉に近いです。

というか、人は言葉をとおしてルールをとらえます。言葉がルールなのではありません。人は言葉にルールを見てしまうという言い方もできるでしょう。

あらゆるプレイ（遊技や競技や演技）にはルールがあります。あらゆるプレイには振り、つまり動きや仕草があるわけですが、その動きや仕草をつかさどるのがルールだとも言えそうです。司令塔みたいなものですね。

＊

じつは、この司令塔、つまりルールですが、ないんです。存在しないんです。あると思われているだけなんです。でも、あると人は思いこんでいますから、忖度します。「△△って〇〇じゃないかな？」とか、「△△するためには〇〇するんじゃないかな？」みたいに、忖度しまくるんです。

忖度、配慮、想像、推測、空想、妄想、幻想、幻覚、錯覚、知覚、なんでもありません。なにしろ、対象はないんですから、そうなります。

あらゆるプレイ（遊技や競技や演技）にはルールがあると人は想定しています。あらゆるプレイには振り、つまり動きや仕草があり、その動きや仕草をつかさどるのがルールだとも言えそうですが、じつはルールは「ない」のです。

「ない」と困るので、ルールが「ある」と決めたのです。ほら、ルールは「決まり」と言います。これで決まり。忘れがちなので、これからは決まりと呼びます。

そりゃそうですよね。決まりは「決めた」から「ある」ものであって、最初から「自然にある」わけがないじゃありませんか。しかもルールはたいてい言葉という「ない」もので決めてあります。

ないない尽くし。ないの空回り。そのうえ決まりはしょちゅう変わります。いや、ないものが変わるわけがありません。「変わった」と、これまた決めるだけです。決めるの空回り。

ルールの空回り。決めただけで「ない」ルールの空回り。「ない」けど（「ない」から）「ある」と決めた決まりの空回り。

＊

「ルールは決まりであって決めたもの」とか「「ない」けど（「ない」から）「ある」と決めた決まりの空回り」ということに、すごく敏感な人がいました。そして、ものすごい本を書きました。

「ルールは決まりであって決めたもの」という言い回しは、駄洒落ですが、その人は駄洒落の名人でもありました。

「「ない」けど（「ない」から）「ある」と決めた決まりの空回り」みたいな、めんどくさい言い方がありますが、その人はめんどくさい言い方の名人でもありました。

こういう駄洒落やめんどくさい言い方を、広い意味でのレトリックとか言葉の綾と言いますが、その名人は日本語で書いた人ではありません。英語で書いたのです。

＊

ルイス・キャロルの書いた『不思議の国のアリス』にチェシャ猫の話が出てきます。簡単に説明すると、猫が笑って、その笑いだけが残るといふ、例のお話です。

猫という物つまり具象が消えて、笑いという表情つまり抽象が残る——。つまり、「ない」のに「ある」ように思える。それだけなら、いいのですが、「ない」のに「ある」ように思えるその笑いが増殖して、あちこちでシンクロしているのですから、困ったものです。

あちこちとは世界のことです。人の世界です。人の世界には、たとえば現実の世界と言葉の世界があります（ほかにもあるようですが、ここでは触れません）。

困ったことに、言葉の世界と現実の世界は噛み合っていないようなのです。まして一対一に対応しているはずもないもようです。途方もなくズレているという意味です。そして、人はふつうそのズレには気づかないのです。

人がずれているからです。人がずれているから、言葉の世界も現実の世界もずれていて、その両者が噛み合うわけがないという意味です。

そのズレにきわめて意識的であったという点が、ルイス・キャロルのすごさです。私はこんなすごい人をほかに知りません。これは『不思議の国のアリス』を読むと、体感的に実感できると思います。ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』を読むと、頭で理解できるかもしれません。

*

ルイス・キャロルって面白い話をとってもリアルに書いた人です。私には難しすぎて苦手なのですが、古今東西において稀に見る作家だと思います。あれだけこみいった、ややこしいことを子ども向けのお話という形でリアルに書ける人なのですから。

『不思議の国のアリス』の英語の文章は、本来は他の言語に翻訳できない気がします。説明的に冗漫に、つまりくだくだと訳すか、大ざっぱな訳文に詳細な注解をほどこしてお茶を濁すしかないのです（ただし翻案はできると思いますし、何種類か目にしたことがあります、どれもが素晴らしい訳業でした）。

翻訳できないのは、レトリック、言い換えると言葉の綾だらけだからです。駄洒落（韻とも言います）や、さかしまとあべこべ、つまりめんどくさい言い方（パラドックスとも言います）があちこちでプレイ（遊技・競技・演技）している世界だからです。

おとながまともに読むと、目がまわり、頭が芯からしびれてきます。こどもがふつうに読むと、あるいは読み聞かせをしてもらうと、きゃっきゃと喜んだり、うっとりした表情を浮かべます。

ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが看破したように、「こどもは形而上学的存在である」(L'enfant est un être métaphysique. — Gilles Deleuze, Felix Gatari: L'Anti-dipe) と言えそうです。

駄目押しで言いますが、こどもはあくまでも「形而上学的」な存在なのであって、哲学的な存在では断じてありません。形而上学的とは、必ずしも知的でも知性的でも（むしろ、痴、稚、恥なのです）、ましてや論理的でもないのです。

＊

上で述べたように『不思議の国のアリス』の英語の文章は、言葉の綾だらけの、いわば「ありえない文章」なのですが、そんな文章を書いてみたいと夢見て——ただし、日本語の書き手である私は日本語で、そして私のやり方で——、ひらすら言葉の綾を編んでいます。

途方もない夢。こども時代の夢。夢また夢。夢に夢見る。夢だけなら見られそうです。ありえないのが夢ですから。

する、される

＊

路上で負傷して歩けなくなり、通りかかった人におんぶされて、とりあえず安全な場所へと運ばれた。

見も知らぬ人の背中にひっしにしがみつकिながら、涙が出てきた。その人の親切にではなく、情けない自分にではなく、悲しいその状況にではなく、懐かしさでいっぱいになる自分がいた。

幼いころに、母親の背中にしがみついていたときの記憶が、腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく、全身的によみがえってくる思いがした。

以前に、こんなことがありました。

「腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく」と書きましたが、まさにそんな感じだったのです。体の部位のさかいがないだけでなく、相手の体と自分の体のさかいも感じられない一体感を覚えました。

おんぶをされるというのは、相手に抱きつくようなかたちにもなります。背後から抱く感じですが。ふだん人と接触することのない私は、あのときほどうろたえたことはありませんでした。

＊

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

いま挙げたのは、触覚とか触感的な身振り、動作、行為、動詞です。

目をつむって、上の動作をしたり、思いえがいたり、思いだすと分かりますが、「する」と「される」が同時に起きている場合があります。

触覚とは、相手、つまり人や物や生物との双方向で相互的な行為だからです。

対象がない状態でひとりで触れるわけにはいかないという意味です。これと対照的なのが視覚だと思います。視覚は絵にしますから、言葉と相性がいいのです。一方の言葉は抽象と相性がいいです。

言葉の基本的な身振りは「分ける」だからです。部分に分断するのです。余計な部分は捨てることもあります。つまり抽象です。その代わり、すっきりはします。ある程度は。

＊

こどもをだっこしていると、抱いているのか抱かれているのか分からない気分になることがある。これは、ある女性から聞いた話です。子をもった経験のない私は感心しながら聞いていました。

「あと、お乳をやっているとき、うちは男の子なんですけど、乳首を口でふくまれていると、何というか、夫と重なるんです——」

女性はそこで口をつぐんで、その話はそれで終わったのですが、それ以上尋ねる気にはなりませんでした。

＊

性行為のときに、するとされるのさかいが不明になるとか、自分の体と相手の体のさかいが消えた感じがするとか、自分がどこにいるのか、なんなのか、だれなのか頭がない状態におちいる。

そうした状況は、小説、映画、テレビドラマで繰り返されてきます。表現の仕方し

だいで、いやらしくも、うつくしくも、きれいにも、きたならしくも、ほっこりにも、暴力的にもなります。

「する・される」が不明になるのは、性行為だけでなく、読むとき、書くとき、映画や動画を見るとき、お芝居を見るとき、歌を歌ったり、音楽を聞くときにも起きる日常的な体感ではないかとも思います。

私は不案内なのですが、たぶん、ゲームやスポーツや楽器の演奏でもあるのではないのでしょうか。

そういう状況をどう言葉にすればいいのでしょうか。描いた言葉はあります。数えきれないほどあります。文学でも、学術的な論文でも。でも、しっくりこないのです。

そうかなあ。そうだったかなあ。そういうものなのかなあ。

言葉に期待しすぎているのかもしれません。

＊

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

こうした行為、動作もひとりではできません。相手や対象とのかかわりあいから生まれる出来事です。

「する」と「される」が言葉としてあるから、つかうだけの状況に投げ込まれている。それが人と言葉の関係であり、その言葉とは必ずしも世界や現実を「正しく」反映したものではないのです。

いま「正しく」を括弧に入れたのは、そもそも「正しい・正しく」なんてあるの？
と思っているからです。言葉は欠陥品だと考えているので、慎重になってしまうのですが、人それぞれです。

＊

車の運転をする人も同乗者も移動しながら静止している、静止していると思いきんでいるが、じつは動いている。

こういう文を書いていると、自分の表現力のなさを棚に上げて、言葉はなんてまどろっこしいのだろうとか、言葉にもてあそばれているなあ、なんて思うことがあります。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもあると感じる瞬間です。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術である、というわけです。

いま書いたような騙りに満ちた文自体が、記述であり、既述であり、奇術であり、詭術なのですから、語るに落ちるところか、騙るに落ちるという感じで、呆れかえって思わずのけぞりそうになる自分がいます。

＊

言葉は物を見えなくしているのではないか。いや、正確には言葉で物が見えなくなっている部分もあるのではないか。そんなふうに思います。

たとえば、「〇〇する」と「〇〇される」という言い方があるから、ある物や事や現象を見て、「する」と「される」に「分けて」しまう。それで「分かった」気分になるという意味です。

でも、じっさいには「する」と「される」のさかいが不明な事態というのはいりそうです。訳が分からないというよりも、分けが分からなくなっているときですから、冷静になれば分けが分かるでしょうなんて短絡したくはありません。

世界はそんなに単純明快だとはとうてい思えないのです。

＊

言葉をつかうと世界は「ある程度」単純明快に見えるでしょう。言葉の世界に入るからです。言界は現界とは異なります。「ある程度」の対応や関係はあるにちがいません。

人は言界と現界と幻界のあいだを行き来している、あるいは複数の界に同時にいる、とも言えそうです。ただし、限界があります。それぞれの界が一对一に対応した関係にあるわけではないからです。

食い違い、ずれ、誤差、錯覚、ノイズがあるはずで、それが限界です。限りがあるわけです。かぎりなくかぎりがあるはずで。

あらゆる現象や、言象や幻象が、たがいに整然と対応しあうという形で、人に都合よく存在しているわけでもないでしょう。いや、存在するどころか、しよせん、どこかの阿呆がつくった自分語でしかありません。

＊

言界は現界に追いつけません。言葉や言い回しの数が圧倒的に少ないからです。現界の複雑さについていけないのです。これが言界の限界である減界です。

限りなく少ないもので限りなく多いものを組み立てようとするに土台無理があるのです。少ない限りには単純明快に見えるという利点もあります。

そこそこの数で無数を説明する利点はそこにありますが、「そこそこ」であるという限界を念頭に置かないと過信にいたるのは分かりやすい話だと思います。

＊

目に見える世界、つまり眼界もまた、限界にあります。視野と視点とは、枠と焦点で

もあります。つまり、見える範囲には限りがあり、見るとは見えている部分を忘れてたり意識に置かないようにして、ある一点に集中することです。

視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。※笑点や消点（盲点とか死角でしたっけ？）もあるでしょう。

集中すれば、捨てる部分が必ず出てきます。捨てないで集中しようなんてありえません。虫のいい話です。

俯瞰や展望とは、世界や宇宙のある部分をながめることにほかなりません。全体とは必ず部分なのです。あらゆる俯瞰と展望は局所的、つまりローカルなものだと言えます。

*

人は俯瞰が好きです。何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思いこんでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。

俯瞰とは、場所、つまり空間だけではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

話を縮小します。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史——。歴史は時間的な俯瞰と見なすことができますが、それぞれの歴史は、やはりローカルなものです。

ある部分、ある特定の要素、ある特殊な視野と視点（立場）からながめているだけです。

たとえば、世界史という言葉は言葉の綾です。世界史という言葉があるから世界史があると思ってしまう。

各国、各地域、各言語圏、各文化圏にそれぞれの世界史があります。世界史はローカルなものなのです。「世界史」間の闘争も起きています。戦争にもなります。

しかも、いま挙げた各〇〇の中に、さらにさまざまな考えや意見に基づく世界史があります。この国でもあります。「世界史観」間の争いもありますね。話が、ややこしくてごめんなさい。

普遍的な世界史などないのです。それぞれの立場と視点による無数の世界史があると言えます。世界史とは名前だけがそうなっているのであって、ある時代のある時期という時間、ある場所という空間の制約の中にあるわけです。

人に世界が俯瞰できるわけがないじゃありませんか。時間的にも、空間的にもです。世界地図も言葉の綾という意味です。

このように人には、自分にできもしないことや自分に検証もできないことを言葉にする習性があります。真理や普遍や客観や魔法や悟りがそうです（努力目標なのかもしれません）。

＊

言界は現界とずれています。どれくらいずれているかは、人それぞれでしょう。印象の問題だからです。そこそこずれているか、とほうもなくずれているか。

言界と現界がそこそこ対応していると感じて、たとえば世界史という言葉が文字どおりに取ってしまう。これは致し方ないことです。

人は目にした文字、読んだ文字を、いったん信じます。信じないと読めないからです。読むことは信じることなのです。

判断、批判、否定、評価は、信じた後に来ます。ただ信じることの容易さにくらべて、判断、批判、否定、評価にはエネルギーを要します。考えなければならないし、調べることも必要でしょう。

面倒なのです。だから、たいてい「信じた」だけが残ります。

＊

空間的なものにしろ、時間的なものにしろ、俯瞰はローカル、つまり局所的なものですが、ありません。そもそも視野自体が枠であって、枠には限りがあります。

俯瞰の語義としてある「全体を見おろす」というのは「部分を見おろす」であるという意味です。あくまでも見ているのは部分なのです。

また視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。集中すれば、捨てる部分、見ない部分が必ず出てきます。

「捨てる」と「見ない」を選択と排除と言い換えることもできます。その結果として、「たまたま残ったもの」が、たとえば歴史を構成するのです。必然でそうなっているわけはありません。

また、良いものが残ったとは必ずしも言えないでしょう。運が良かったとは言えると思います。すごい強運です。

残ったものは強いです。無言で既得権益を主張することができるからです。しかも誰も既得権益とは言いません。

遺産や古典としてもてはやされます。それしか残っていないのですから、失われた同時代のものと比較できません。褒めるしかないでしょう。

長く残っているものにはファンも多いです。崇拜者もたくさんいるでしょう。ますます評価されます。ただし競争者のいない評価です。

結果オーライということです。

*

部分なき全体、つまり全き全体とは抽象でしょう。抽象は便利です。焦点や視点と同じく、捨てること、無視することで成り立つからです。つまり、抽象とはすかすかだという意味です。

部分に集中することで全体をながめるという抽象は、人類の悲願だと思われませんが、それは彼岸の話でしょう。この世ではありえない話です。虫のいい、貪欲な願望であることは確かです。

幻界ではありえる話でしょう。幻界はそうした不条理で荒唐無稽な話に満ちています。現界での、願い、思い、祈りは、人の幻界で花咲きます。

*

飛雁はつつましく身の程をわきまえて、俯瞰しながら飛行していると思われま

す。飛雁には彼岸にいたろうとするような悲願はなく、ただ此岸にとどまっている。その

姿は美しいです。

どうか飛丸に当たりませんように。

*

する・される、部分・全体、世界史が言葉の綾ではないかというお話でした。

歯ブラシを共有することができますか？

＊

歯ブラシを共有することができますか？

歯ブラシを共有することができますか？

相手しだいかもしれません。

大好きな人、愛している人となら、できる。

家族となら、いいかな？ でも、弟とだけは嫌。

ぜったいに無理。いくら好きな人だといっても、歯ブラシはね。

そもそも相手しだいでしょ？ 相手の気持ちを確認したり、相手の意見を聞かないうちには何とも言えないな。

相手がいいって言っても無理。

とくに口に入れるものを共有することに対し、人は抵抗を覚える気がします。

＊

歯ブラシではなくて、トイレはどうですか？ 自転車は？ 消しゴムは？ タオルは？ スマホは？ パソコンは？ スリッパは？ お箸は？ 下着は？ 車は？ ペットは？ 友達は？ きょうだいは？ 家族は？ 好きな人は？ 部屋は？ 家は？ 水は？ 空気は？ ときは？ 国は？ 地球は？ 宇宙は？

すでに共有している。つまり、もういっしょに使っているものも入っていませんか？

たとえば、きょうだいや家族を共有するのは、出生や家族の誰かが結婚した場合と考えることもできるでしょう。

ある日、ある時から、あなたのおかあさんを、あなたと同じく、おかあさんと呼ぶ人ができる、あるいは出てくる、あるいは現れる。そんなこともありえます。おかあさん、お母さん、お義母さん。

いまでは、出生や結婚というかたちをとらなくても、そういう状況がありえます。いや、昔からありえたのかもしれませんが。

＊

言葉はどうでしょう？

歯ブラシと同様に口に入れたり口にするものです。

＊

あるものを共有することによって、あるものがけがされたような気になることがあります。けがす、汚す、穢す。

二人で共有するのと、三人で共有するのと、十人、百人、一万人、一億人で共有するのは、違う気がします。もちろん何を共有するかにもよります。

共有することによって、かたちが変わったり、消耗したり、におうようになったり、手触りが変わったり、壊されたり、汚されたり、使った時に「あれっ？」という違和感を覚えたり、変な癖がついていたりする。なんとなく、分かりませんか？

「私だけの○○」、「僕だけの○○」、「わたしだけの○○」、「俺だけの○○」

誰もが当たり前のようにそう主張することがあります。

むかつとしても、お互いさまだから、相手の主張を認める。怒っても、どうしようもなさそうだから、黙っている。ついつい、「あんたさあ、そう言うけど……」なんて余

計なことを口にして後悔する。ついつい、相手に突っかかってしまう。ぜったいに認められない気持ちが抑えられない。

*

共有するとは、ままならさと同義なのかもしれません。

固有名詞で考えてみましょう。

固有名詞で考えてみましょう。歯ブラシと同様に口に入れたり口にするものですが、簡単に人名と地名に絞って話を進めさせてください。商品名や団体名や集団名や作品名や曲名は省くという意味です。

たとえば、ある有名人について誰かと話しているとします。話すさいには人名を使わずにはられません。「ああ、〇〇さんね」という具合に便利です。

ところが、話せば話すほど、自分のいだいている〇〇さんのイメージと相手のいだいているイメージに違いがあって、うんざりしてくるのです。

議論に発展していくこともあるでしょう。これはやばくなりそうだと感じて、当たり障りのない意見を言ってお茶を濁すなんてざらにあります。人名だけでなく、地名や国名でもそうです。

「わたしとあなたは意見が合うね」、「同感。わたしも〇〇は△△だなあと思っていたのよ」、「なるほどね。分かる分かる」、「おっしゃるとおりです」

形だけとかうわべだけの同意や共感ではなく、もちろん、本当に意気投合する場合もあるでしょう。

*

固有名詞とは、ある特定の物や場所や人に名前を付けて、他の同類の名詞とわざわざ

区別して話をしやすくしているはずなのに、話がややこしくなる場合が多いようです。

これは固有名詞が共有されているからにほかなりません。ある人名をみんなが共有して、「ああ、あの〇〇さんね」という具合に名指して使っている。つまり共有しているからです。ここまではいいのです。

共有とは文字どおり他にも使っている人がいるので自分の思いどおりにはならないことである、つまり言葉の共有とは言葉のままならなさと同義であることを忘れてはならないでしょう。

「あの〇〇さん」についての各人のイメージや意見は人それぞれです。肯定的な印象を持っている人もいれば、毛嫌いしている人もいるし、無関心な人もいます。同じ人名を使って話をしても、食い違いが出てくるのは当然なのです。

＊

あなたには崇拝していたり死ぬほど好きだったりする人がいませんか。身近な存在ではなく、広く名の知れた人物の話です。いわゆる有名人とか偉人とか「神」や「神さま」や「レジェンド」と呼ばれたり呼ばれていた人と考えてもいいです。芸術家や作家であれば、その人の作品でもかまいません。

その人や作品について、「私だけの〇〇」と思っていると、別の人が「わたしだけの〇〇」とか「ぼくだけの〇〇」みたいに、当たり前のように「自分の〇〇」を主張します。

〇〇という固有名詞が共有されているからにほかなりません。上で述べたように、言葉の共有とは言葉のままならなさと同義であることを思い出しましょう。

＊

固有名詞とは、世の中に一つしかないものを指す、一つしかない言葉なのです。そのはずなのです。そう言われているのです。

同じ、同一のものを共有することは難しかったり、不可能であったりします。でも、それを指す言葉を使えば、複数の人、それどころか無数の人と共有できます。

なぜでしょう？ なぜ、そんなことが起こるのでしょう？

たぶん、外にあるからです。自分の中にあることは確かです。言葉は外にあって、外からやって来て、あなたが口にしたり、文字として書いたりできるということでしょう。

不思議と言えば不思議です。えっ？ いったいどういうことなの？ という感じです。その不思議さは、次に述べる懸念から来ている気がします。

そもそも所有していないものを共有している気になっている（そもそも持ってもいないものを、他の人といっしょに使っているように思いこんでいる）。そこから来る、とりとめのなさ（混乱）と懸念。共有することのままならさは、当然であり必然でもあるのです。

〇〇という固有名詞が共有されている。ひいては、言葉の共有とはそういうものなのだと考えられます。ままならないのは当たり前だという意味です。

いま言葉と書きましたが、

いま言葉と書きましたが、固有名詞だけではなく、普通の名詞にも当てはまります。犬、猫、山、川、寿司、牛肉、豚肉、雨、雪……。形容詞もそうです。悲しい、うれしい、痛い、きれい、きたない、気持ちいい、気持ち悪い……。みんなで共有しているので、みんなが勝手に使っている部分があります。

食い違いが生じるという意味です。そのため、ままならないと覚えることもあるにちがいありません。しかもその食い違いを突きつめるほど険悪な雰囲気になります。

「あれが犬か？ 〇〇犬こそが犬だよ」、「あんたはそう言うけど、だいたい寿司ってものはね」、「英国には hill はあっても mountain はないって言う、英国人がいたよ。山は山じゃん？」、「川と河とカワは違うって、のたまう方がいらっしゃるのよ」「えっ！ 同

じなんですか?」「.....」、「なんで、豚肉が駄目で牛肉ならいいの?」、「えっ、気持ち悪いかな? わたしはあれが気持ちいいけど」

『きれいは汚い、汚いはきれい』、『フェイクニュース!』、「あのきたなくて汚れた川が、けがれのない清く聖なる川なんだ。汚れ(よごれ)と汚れ(けがれ)は違うってこと。分かる?」「それって、呪い(まじない)と呪い(のろい)に似てね?」「いや、むしろ新聞と新聞紙の違いに似ている」、「真理は一つなんだって、えっとねえ.....、それとも事実一つだけ?」、「真理と心理と真実と事実と無実は違うの?」、「ケチっ!」「おまえが、ケチ!」、「それはないって」、「おい、いま、何て言った?」、「○○とは何かについて、このさい徹底的に話し合おう」

＊

あなたが崇拜していたり死ぬほど好きな人に話を戻します。

その人について「私だけの○○」と思っていると、別の人が「わたしだけの○○」とか「ぼくだけの○○」みたいに、当たり前のように「自分の○○」を主張します。

いま書いた文の○○にあなたの死ぬほど好きな、あるいは崇拜している人の名前を入れてみてください。ただし自分こそが○○の真の理解者であり、自分だけが真に○○を愛している。それくらいに思っていなければ、崇拜とか「死ぬほど好き」とは言えません。

＊

話をずらします。

あなたが崇拜していたり死ぬほど好きな土地(場所)や考え方(思想)や生き方(信条)に話を移します。

「私(たち)だけの○○」と思っていると、別の人が「わたし(たち)だけの○○」とか「ぼく(たち)だけの○○」みたいに、当たり前のように「自分(たち)の○○」を主張します。

いま書いた文の○○にあなたの死ぬほど好きな、あるいは崇拜している土地(場所)や

考え方（思想）や生き方（信条）を入れてみてください。ただし自分（たち）こそが〇〇の真の理解者であり、自分（たち）だけが真に〇〇を愛している。それくらいに思っていないければ、崇拜とか「死ぬほど好き」とは言えません。

なにしろ、崇拜や愛や「死ぬほど好き」が争いや戦争さえ生むからです。いま起こっている争いや戦争を思いうかべてください。

そうした争いのさいに、争う両者の間で共通して使われる（共有される）のが固有名詞や名詞をはじめとする言葉なのです。

とりわけ固有名詞はインパクトが強いですから、スローガンや宣伝や情報戦によく用いられます。固有、つまり特定であったり、唯一の物や人を指すはずの名詞が、異なる意見や印象やイメージをはらむ名詞として働くという理屈です。

「同じ・同一」と「異なる」が同時に起きているとも言えるでしょう。

究極のままならさを感じられるかもしれませんが、これが言葉の常態なのです。言葉ではつねに「同じ・同一」と「異なる」が同時に起きているという意味です。

共有されているのは言葉なのです。

共有されているのは言葉なのです。物や事や現象や幻と呼ばれている「何か」ではありません。歯ブラシと同様に口に入れたり口にするものであるとはいえ、外からやって来て、依然として外にあり、外でありつづける。これが言葉です。

外にある、外である、とは、あなたのものではないという意味です。

（もしそうであれば、言葉はそもそも所有できないはずで、さらにいうなら、所有と共有はともに幻とか途方もない抽象に思えてきます。）

外にないものは共有できないのかもしれませんが。

(所有も共有も、主張することならできます。ただし、それは言葉でしかありません。「私(たち)のものだ」となら、言葉でいくらでも言えるという意味です。)

共有することのままならさについてお話いたしました。

外にあって、外からやって来て、外であるもの

＊

手に入れているわけではないのに、自分のものだと思っていて、自分のものだから、自分の思いのままになると思っているけど、なかなか言うことを聞いてくれない。

外にあるけど、中に入ってくるから、自分のものとか自分の一部だと思っていて、自分のものだし自分の一部なのだから、自分の思いのままになると思っているけど、なかなか思いどおりになってくれないし、ときには逆らってくるみたいな動きをする。

外にあるから遠隔操作するしかないとはいえ、隔靴搔痒（かっかそうよう・靴の上から痒いところを搔いているみたい）で、もどかしくてたまらない、つまり直接に動かしているわけではなくて間接的に動かしている、要するに「やっている感」だけみたいで、じつにいらいらする。念力ができたらなあをつくづく思う。

自分のものなんだから、使ったり操っているつもりが、こっちがもてあそばれているというか、こっちがこき使われているような気持ちになることがあって、なんだかいつとっしょにいとSMプレイをやっているみたいだなあ、なんて感じることもある。こっちが奴隷で下僕の状況は永遠に続くのか。いや、永遠なんてことはない。こっちが持ちそうもない。

誰もが自分が生まれたときから既にあって、それを使っている周りの人たちを真似たり学んだりして、使っている。周りの人たちも、自分と同じくそういうことをしてきたらしいから、大昔からずっと続いているみたい。

要するに、みんなして借りていっしょに使っているということか。借りたものは返さなければならない。そうかあ、貸し借りしているわけだ。やり取り、キャッチボール、ぎぶ・あんど・ていくね。

それにしても、みんなでいっしょに使っていると、間違いやズレや誤解やすれ違いやノイズやすっとぼけやシカトや音信不通や誤配や未配や沈滞や借りっぱなしや借金や未払いや過積載がじつに多い。

それでいて、月に仲間を送りこんだし、2000年問題にも打ち勝ったし、この星の気温を○度上げんだから、これは大したものだとか上出来だと言えるし、やっぱりねと残念にも怖くも感じるこの頃。

こういうのは、貸し借りされるものに罪はなくて、貸し借りしているほうの自業自得だという気がしてならない。

続・外にあって、外からやって来て、外であるもの

＊

外にあって、外からやって来て、外であるもの——とは言葉の事です。私は言葉のことしか書いていません。我ながら、しつこいやつだと呆れていますが、自分なので付き合っていくしかないようです。

タイトルを細切れにして、説明してみます。

外にあって、

言葉は外にあります。どういうことかと申しますと、誰もが生まれたときにすでにある、といえば分かりやすいかと思います。生まれたときに、外にあったということです。なぜか、外にあったのです。

なぜなのでしょうね？

言葉がなぜ外にあるかは考えても答えは出そうもありません。私たちが、生まれた瞬間に、言葉がある環境に放りこまれたという事実の重みを噛みしめるしかないようです。

外からやって来て、

いま私は言葉を使ってこの記事を書いています。この記事をお読みになっているあなたは、ここに書かれた文字を読んでいたたり見ていたりしているはずですよ。

その言葉はどこから来たのでしょうか？ 私には分かりません。分からないので話を作ってみます。でっちあげるとか捏造するということです。騙るとも言います。

たぶん、外からやって来たのです。「アホか！」そんな声が聞こえた気がします。凶星を指されてうろたえています。外としか言いようがないのです。

「おい、泥棒はどっちに逃げた？」「あっち」

そんな感じです。「外」ってどっち？ 「外から」と言われても困りますよね。話を簡単にするために、「あっち」の乗りで「外」とざっくり名指すことをお許しください。じつのところ、それしか言いようがないのです。

＊

言葉が外から来たというのは、真似た、学んだ、見た、聞いた。そんなふうにも言えると思います。とにかく、言葉は「外にある」のですから、そうやって「外からやって来た」のでしょう。

外からやって来て「中に入った」に違いありません。「中」って何でしょう？ というか、どこなのでしょう？ 「中」としか言いようがありません。「中」ってどっち？

「おい、泥棒はどっちに逃げた？」「あっち」

「アホか！」と、またお叱りの言葉をいただいたようです。では、有り難く頂戴し、アホはアホなりに、『あっち』は、とにかく『あっち』なの」の乗りで、『中』は、とにかく『中』なんです」、という身も蓋もない言い方で話を続けさせていただきます。

＊

それにしても、「中」ではあまりにも愛想がないので、ちょっとだけ色づけします。脳、心、意識、魂、体、存在、自分。「中に入った」とするなら、いま挙げた言葉の指す「何か」に入ったとも考えられるでしょう。

これらの「何か」はとりあえず名指されているだけで、「何なのか」分からないものです。分からないけど名前があるのです。名づけるとは、何だか分からない「何か」を手なづける行為だという気がします。

手なずける、手懐ける、手名付ける。

怖いから、不安だから名付けるのです。生餌（なまえと読みます、生の餌のことです）を与えて、静めるわけです。供物とかお供えですね。で、何を静めるのかと言いますと、おそらく自分です。

相手ではありません（相手はおそらく幻です）。ビビっている自分の気持ちを静めるのです。

（人は「いないもの」や「ないもの」に取り憑かれます。それが名前（名付ける・呼ぶ）や言葉（放つ・話す・搔く・描く・書く）に結びつくのです。）

*

外は怖いです。何か分からないものに満ち満ちているのです。外が恐ろしいときには、どうすればいいのでしょうか？

ここでお断りしますが、外には出られません。怖くて出られないだけでなく、物理的に出られないのです。

なにしろ、人はこっち、つまり「中」にいるからです。言い換えると、脳、心、意識、魂、体、存在、自分のことです。ここから外に出ることは物理的に無理なのです。

外が恐ろしいので（しかも外には出られません）、不安におちいつている「中」を静めるしかないという理屈になります。

*

言葉は、外からやって来て中に入る。

その言葉は、世界、森羅万象、事物・様態・現象（こと・もの・ありさま・ありよう・できごと）の代わりに、人の中に入ってくるのです。

「中」に入れば占めたもの。まさに「こっちのもの」。

言葉とは「代わり」なのです。代理、代表、お使い、使者、回し者、間諜、エージェント、代理店、代理人という感じです（この「代わり」の両義性にご注意願います）。

簡単に説明しますと、猫と呼ばれている「何か」を名指している「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉は、猫の代わりだという意味です。

猫を中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れるわけにはいかないの
で、「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉に変えて、中に入れるわけです。

外であるもの

猫を中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れるわけにはいかないの
で、「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉に変えて、中に入れるわけです――。

上で、こう書きましたが、じつはズルをしています。そんな馬鹿なことがあるわけは
ないのです。

*

中に入れる「猫・ねこ・ネコ・neko」という言葉ですが、具体的には音声であったり、
文字であったり、手話であったり（申し訳ありません、手話の猫は知りません）、指文字
であったり（申し訳ありません、指文字の猫は知りません）、点字であったり（申し訳あ
りません、点字の猫は知りません）、指点字であったり（申し訳ありません、指点字の猫
は知りません）します。

もちろん、「猫・ねこ・ネコ・neko」は、言語や方言の数だけあるはずですが、ここ
では扱えません。ごめんなさい。

いずれにせよ、言葉を中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れるなんて芸当ができるでしょうか？ 話を簡単にするために、そういうズルをした言い方をして、知らん顔をすることもできます。でも、私にはできません。

言葉は外にあるのです。具体的には、音声であり文字です。音声とは空気の震えとして伝わって鼓膜を震えさせるから「聞こえる」のだと学校で習った記憶があります。音声とは、きっとそういうものなのでしょう。

空気の振動である音声は、空気や鼓膜を構成する物質があって成立し、人に知覚されるということですね。極端に言うと、音声とは物質なんです。

文字とは、形であり模様です。インクの染みであったり、画素の集まりであったりします。いまみなさんがご覧になっている文字は画素の集まりだと思います。

形や模様とは素材、つまりインクや画素や絵の具や墨や粘土があって成立します。その意味では抽象なのでしょうが、物質がなければ人には知覚されません。極端に言うと、文字とは人にとっては物質なのです。分子や原子からなる物質です。

(※この部分を簡単に言うと、「言葉が中に入る」というすっきりとした話は、そう簡単でもすっきりしてもいなくて、言葉はそのまま入るのではなく、何らかのかたちで何かが変わって中に入るというややこしい話なのです。「何らかのかたちで」も「何かに」も不明だという意味です。)

*

音声という物質や文字という物質が、中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入るのでしょうか？ インクや墨や空気を体内に吸収すればできると答えた方に座布団を二枚、いや一枚だけ進呈します。

個人的には、音声という物質や文字という物質が「中」（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入るとは考えられません。

音声は震え・振動と物質、文字は形・模様と物質があって成立するものだからです。言葉、つまり声と文字は抽象と具象が同時にあって成立するとも言えるでしょう。片方だけでは片手落ちなのです。

たぶん、たぶんですよ、音声や文字は人の中に入ったときには、変わっているでしょう。変わって代わりものになっている気がします。気がするだけですよ。

本当のことは知りませんし、そもそもここでは本当のことなんていう大それたことはここでは扱えません。言葉を使って語っているだけです。語るは騙るでしかないのです。たぶん。

＊

よろしいでしょうか。言葉を使って言葉を語る。そんな妙ちきりんなことをここではやっているのです。これが騙り、つまりペテンや詐欺でなくて何なのでしょう？

脳が脳を語る。鏡で鏡を映す。夢で夢を見る。なんていうのと似ていませんか？ 正気の沙汰ではない。笑気のサタデーナイト。つまり、ナンセンスなギャグでしかありません。

外なんて語ることはできっこないのです。それでも、語ろうとするなら、騙るしかないという、まさにかたるに落ちたお話になります。そもそも、こういうことは本気でやってはいけないのでしょう。

がっかりするしかない身も蓋もない話は、そこまでにして気持ちいい話をしましょう。

気持ちいい話

人はどうして言葉を入れるのでしょうか？ もっと詳しく言うと、どうして言葉を中（たとえば、脳、心、意識、魂、体、存在、自分）に入れたりするのでしょうか？

入れて中で何に変わっているか、なんて難しいとか分かりっこない話はしません。「なんで入れるの?」「入れるとなんかいいことがあるの?」という話をしましょう。

たぶん、たぶんですよ、入れると気持ちがいいのです。めちゃくちゃ気持ちいい。さもなきゃ入れませんよ。大昔から何度も何度も繰り返して入れてきているのですよ。世界中でみんなしてせっせと入れているのですよ。

入れるだけじゃなくて出してもいます。入れると気持ちがいいし、出すと気持ちがいいからです。なにしろ、人は気持ちがいいことが大好きなのです。

人は世界中で気持ちいいことに夢中になり、気持ちがよくなるために血道を上げていませんか? 何が気持ちがいいかは人それぞれですけど。もっと、もっとというふうに人は切りなく欲望します。

とにもかくにも、脳内物質とかいうものがどぼどぼ出てくるから、人は入れるし出すのです。入れると出すに依存し嗜癖（しへき）しているとしか考えられません。

＊

食べる、飲む、吸う、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、これらは全部入れているんです。出すのも気持ちがいいです。排泄、分泌、発汗、生理現象、どれもすっきりさっぱりします。あはんとなることもありますね。

もちろん、入れると出すには痛みや苦しみなどもなう場合があります。申し訳ありませんが、ここでは省略させていただきます。個人的な話になりますが、痛みについて語るのは勘弁願いたいのです。具体的には病院での処置のことです。

冗談ではなく、入れると出すは死ぬほど痛いし苦しいです。そんな経験をなさった方もたくさんいらっしゃるにちがいません。

＊

人はなんで言葉を使うのでしょうか？ 伝えるため、つまり伝達のためだけではない気がします。

人は気持ちよくなりたいから言葉を使うのだと思います。具体的には、言葉を入れたり出したりするのです。言い換えると、読んだり、聞いたり、見たり、触れたり、話したり、叫んだり、詠んだり、歌ったり、唱えたり、論じたり、書いたりします。ここには「伝える」も入ります。

伝えるとは他人とつながりたいからする行為ですから、やはり「気持ちよくなりたい」に通じると考えられます。じっさいには伝えようとして伝わることは難しいし不可能なことが多いのですが、それでもめげずに人はせつせと伝えようとします。

読む、聞く、見る、触れる、話す、叫ぶ、詠む、歌う、唱える、論じる、書く、伝える――。

どれも気持ちがいいです。適度に苦しいと、これまた気持ちがいいです。適度の締め付けや縛りは気持ちがいいものだというのを、みなさん日常的に経験なさっているのではないのでしょうか。ああきつい、でも気持ちいいわ、なんて。

気持ちよくなるためにたしなむものに嗜好品と薬物がありますが、人にとって最高で最強の嗜好品であり薬物は何でしょう？ 言葉です。

人は言葉という最強の嗜好品であり薬物を楽しむために、さまざまな嗜好品や薬物をたしなんだり摂取します。

コーヒーあるいはお茶を飲みながら詩を書く、あるいは詩を読む至福の時。お酒をちびちびやり、好きな小説を読む最高の時間。書きものや読書の途中で煙草を吸う、これほど心が安らぐ時の過ごし方はない。そういえば、いわゆる麻薬やドラッグを服用して書いたと言われる文学作品は多いです。

お芝居や映画や楽曲やテレビ番組やネット上の映像にも、言葉がともないます。動きに満ちたスポーツも、言葉による解説と言葉で述べられるドラマがあってこそ盛り上が

ります。映像や音楽や動作を一種の言葉と見なす人もいます。

持論ですが、人が臨終という究極の時に必要とするのは、あるいは頭に浮かべるのは顔と言葉だと思います。この顔については、またいつか書きたいです。

*

外にある言葉は人に入ってきます。入って何に変わってどんなふうに変化するのかわかりません。とにかく入るのです。とにかく入れるのです。たぶん、好んで入れています。気持ちがいいから入れているはずですよ。

外はブラックボックスです。外は外ですからぜったいに中から出られないし、外（現実と言ってもいいでしょう）のことは想像したり空想したり遠隔操作や念力で操った気持ちになるしかないのです。

目隠しをして象さんに触れるよりも心もとない話です。自分を取り巻く世界が何が何だか分からないという不安と恐怖。分からないというもどかしさと苦悩。これはおそらく人しか経験しません。

中もまたブラックボックスです。自分の中なのに、どうなっているのかわかりません。想像したり空想したりするしかありません。それでも分からない。分かった気持ちになれない。自分の一部だからこそ、もどかしい、いらいらする、情けない。これもおそらく人しか経験しないでしょう。

外もブラックボックス、中もブラックボックス。外も闇、中も闇。

それを忘れさせてくれるものがあります。そうです。言葉です。

外と中を行ったり来たりする天使

言葉はいじれます。好きなようにいじれます。ただし、外は他の人（他者）や世界や宇宙や森羅万象の領域ですから、いつか入れた言葉を外に出してみても、その言葉が外でどうなるかは予測が付きにくいです。しばしば、裏切られ、がっかりします。

言葉は共有されていると考えられるからです。とはいっても、ひとさまがどう使うかなんて分かりません。それに共有されている言葉について、それぞれの人がままたらなくともどかしい思いをしているとすれば、そもそも共有——共同で所有する、さらには使っている——というのは幻ではないでしょうか。

どうやら言葉は所有できないし（そもそも手に入れていないし手中にないのです）、共有しているというのも錯覚らしいということになりそうです。自分の中にあっただけの言葉が、外ではままたらない動きをするからです。つまり、思いどおりにならないという意味です。「思いどおりにならないもの」を「持っている」なんて言えるのでしょうか。

でも、言葉はいじれます（使うではありません、持つでもありません、操るでもないでしょう）。言葉もまた外にあるので遠隔操作になりますが、話したり、文を作ったり、文字で書いたりできます。言葉をいじる時だけが思いどおりになったと思える至福の時なのです。

たぶん、思いも少しはいじれますが、思いは曖昧模糊としていて、言葉をいじるときのような具体性——なにしろ言葉には物・物質の面、つまり声と文字という側面があります——がありません。言葉は他人に話せますし（伝わるとは限りませんし、またすぐに消えます）、文字として残せます（伝わるとは限りませんし、物ですから複製しない限り壊れたり消えます）。

（※なお、文字が無数に物として複製できるという事実は重いです。また、言葉、思い、現実という順番にいじれなくなることは注目していいと思います。以上については別の機会に書きたいです。）

＊

言葉は外にあり、外からやって来て、中に入って何かになって何かをしています。そして出すこともできます。外（現実）は闇、中（思い）も闇、言葉も闇。

でも、言葉はいじれます。言葉は外（現実）と中（思い）の両方の性質を持っているからかもしれません。外と中の中を行き来するお使いとか天使みたいに考えるのもいいで

しょう。

ただし、この天使は言うことを聞くとは限りません。自分のものとは言えません。お使いのようでいて、使われているのはじつは自分ではないかと思われる時も多々あります。

でも愛おしいです。頼もしくもあります。現実と思いの両面を備え、外であり中でもあるなんて、そんな存在は他にありますか？

天使は笑みなのです。生まれた人が初めて目にするであろう、顔にうかんだ笑みなのです。この笑みこそが、外にあって初めて入ってくるものなのかもしれません。

宝の持ち腐れ

＊

宝の持ち腐れだと思うんです。言葉には優れたところがたくさんあるのに、活用できていない気がします。たとえば、「見る・見える」とか「分かる・分ける」とか「伝える・伝わる」という言葉があります。

「見る・見える」を例に取りますと、「見ない・見えない」という言葉がある、あるいは言い方があるのに、「見る・見える」ばかりが優遇されている気がしてなりません。

肯定、つまりポジティブばかりに目が行き、否定、つまりネガティブがないがしろにされているのです。見ない・見えない、見損なう、見損じる、見間違う、見誤る、見逃す、見外す、見過ごす、なんていう美しくて声に出したい言い方があるのに、あまり見掛けません。

人が何かを見る時に、あるいは見える時に、じっさいにはどれだけのものを見ていないか、見損ねているか、見過ごしているかが、見過ごされているのです。ややこしい言い方で申し訳ありません。

＊

「見る・見える」という言い方があると、人はそういうことが普通であり、当然であり、そういうものだと思いこんでしまう傾向があります。Seeing is believing. 「見ることは信じることなり（百聞は一見にしかず）」

「見ない・見えない」という言葉をもっと使いましょう。たとえば、「見えないものが見えるようになる」とか「見えないのではなく見ていないのだ」なんて素敵な言い方ではありませんか。なるほどと思います。

「見えないものが見えるようになる」とか「見えないものが見える」という言い方をすると、わくわくしませんか？ 逆説めいても聞こえます。こういうのをレトリックと呼ぶ人もいます。

レトリックとは人をわくわくさせるためにあります。人を惹きつけたり引きこむときに使うのです。良い悪いの話ではありません。言葉の働きに注目しているだけです。

私はレトリックが大好きです。よくレトリックだらけの文章を書こうとして、書き損ねてばかりいます。センスがないのだと思います。ナンセンスしかないのです。あ、いまのはレトリックのつもりで書いて書き損ねた好例です。こういうのが恒例なのです。駄洒落という意味です。

＊

個人的には「見る・見える」は「見ない・見えない」と同時に起きているし、「見る・見える」には「見ない・見えない」が満ち満ちている気がします。「不思議の国」は、言葉だけでなく現実でもあるのです。

「見る・見える」という言葉があることで、どれだけ「見ない・見えない」を「見ない・見えない」という事態が生じているか。逆に「見ない・見えない」という言い方を使うことで、どれだけ「見る・見える」がより「見る・見える」に転じるか。

「分かる」という言葉があることで、どれだけ「分からない」が「分からない」という事態が生じているか。逆に「分からない」という言い方を使うことで、どれだけ「分かる」がより「分かる」に転じるか。

そんなことに目を向けたいし、敏感でありたいと思っています。

＊

森羅万象、つまりあらゆる事物や現象の「ありかた・ありよう」は多層的だと思うんです。「事実の一つしかない」とか「真実の一つだけ」という言い方は分かりますが、世界は多面的でもあると思うんです。

言葉は現実には追いつけません。現実が複雑すぎて多元的すぎるからです。言葉の数を考えただけでも現実の多面性をすくいとれません。

でも、言葉を使うと何とでも言えますね。たとえば「人は空を飛ぶ」とか、「人が月に行く」なんて大昔にはたわごとだったのに、いまは実現してます。何とでも言えるという言葉の性質を活用しようではありませんか。

もっと世界が豊かに見えてくるとか、人生が多面的でわくわくしたものになるかもしれません。

「見える」は「見えない」、「見えない」は「見える」、「ある」は「ない」、「ない」は「ある」、「女」は「男」、「男」は「女」、「子ども」は「おとな」、「おとな」は「子ども」なんてふうには。

こういう言い回しは、詩やレトリック（とくに比喩や寓意）や禅問答やナンセンス文学で広く用いられてきました。ややこしそうですが、意外と、みなさんが日常的に経験していることを口にただけかもしれません。

「ある」は「ない」、「ない」は「ある」なんて、まさに言葉のことではありませんか。こんなに面白くて、すごいものはざらにはありませんよ。

宝の持ち腐れだと思うんです。言葉には優れたところがたくさんあるのに、活用できていない気がします。

言葉を言葉として読む

＊

透明な文章とか透明感のある文章という言い方を目にしたことがあります。詩的で素敵な表現ですね。でも、どんな文章が透明であり透明感があるのかが今ひとつ分からないので、その意味では不透明な言い方だとも思います。

透明な文章とか透明感のある文章という言い方で、私が連想するのは、さくさく読める文章です。

読むというよりも見ただけで頭に入ってくる。小説であれば、読んでいると、そのストーリーが手に取るように分かるし、景色が目に見えるように分かる。エッセイや論説文であれば、立ち止まってその意味に首を傾げることなく、内容がするすると入ってくる。

そんな文章を連想します。

読んでいると、それが言葉であることを忘れてしまう、つまりガラスのように透明な文章というわけです。そんな文章を書いてみたいものです。

＊

一方で言葉が言葉であることがもろに感じられる文もあります。俳句、短歌がそうです。短いからです、何度も読めます。凝縮されていますから、集中しても読めます。

織りこまれてあるストーリーやドラマや内容だけでなく、短い文を成り立たせている言葉の節々にまで目が行き届くし、声に出して音を楽しんだり、たとえば使われている言葉が「蛙」であったり、「かえる」であったり、「カエル」であったりすれば、その表記が目につきます。

韻に気づくこともあるでしょう。隠喩や寓意やかけことばを発見することもあるかもしれません。

つまり、言葉であることを実感し体感すらできるわけです。

*

もう少し長い詩でも、いま述べたことが当てはまると思います。詩はじっくりと読んで、それが言葉であること、言葉で書かれていることを感じるのに最適な形式です。

詩を書く人の側でも、そうしたことを意識しているでしょうし、中には言葉として音読されるのを予期していたりもします。げんに詩の朗読はよくおこなわれていますね。誰かが読むだけでなく、作者が音読する場合があります。

音としての言葉だけでなく、表記やレイアウトをととても大切にし、フォントや字体にまで細かい神経を使う詩の書き手もいます。個人的にも知っています。

*

小説にも、そうした言葉として読むという姿勢が、書く側にも、読む側にも見られます。とはいえ、小説は長いですから、しかも散文ですから、つついストーリーだけ、内容だけ、書かれている風景だけを追って読んでしまいます。

長いものを一文一文、一語一語に気を配りながら読むなんて、なかなかできるものではありません。集中した読み方が維持できないのです。

*

エッセイや論説文になると、なおさら、その表現や表記に気を配って読むことはできない気がします。つまり、言葉として読まないという意味です。言葉から成る文を読むと言うよりも、文の向こうにある意味や内容を読むとも言えます。

それでいて、はたまた作者の意図とか思想なんて、書かれていないものまで読んでし

まうのです。ある意味すごいですが、国語の長文読解問題の弊害かもしれません。

＊

(以下は引用です。)

”記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもあると感じる瞬間です。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術である、というわけです。

いま書いたような騙りに満ちた文自体が、記述であり、既述であり、奇術であり、詭術なので、語るに落ちるところか、騙るに落ちるという感じで、呆れかえって思わずのけぞりそうになる自分がいます。”

(拙文「する、される」より引用)

＊

とつぜん、妙ちきりんな文章を引用しましたが、どこが変なのかと言うと、かけことばというか駄洒落が使っているからだと思われま。

なんでこんな文章を書くのでしょうか？

書いた本人に尋ねてみました。

「あなたが読んでいるのは言葉ですよ、言葉は事物の代理なんですよ、現実と一対一に対応なんてしていませんよ、作者の意図とか、思想とか——あ、そんなものは私には無いんですけど——、書かれている内容なんて無い様なもんなんですよ、内容なんてないよー、と言いたいから書いているんです。さらに言うのですね、言葉を使っていると言うよりも、言葉に導かれているとか、言葉にもあそばれているとか、言葉をいじるというよりも、こっちが言葉にいじられているからでもあるんです」

なんて答えが戻ってきました。どういう神経をしているのでしょうか。冗談は顔だけにしてくれ、と言っておきました。

「言葉が好きなのです。愛しているのです。書かれているのは言葉なんですよ。言葉ちゃん、言葉さま、言葉くんなんです。事物の代理、森羅万象の代わりをするしもべとか、人が使うもの、人の所有物、人の共有物みたいに、言葉は言われていますが、言葉は自立した存在であることを忘れてほしくありません」

「言葉は生きているんです、てか、正確に言うのですね、言葉は生きている振りをしているんです、健気じゃありませんか、生きてもいないのに、お茶目にも、生きた振りをして、そのうえ、死んだ振りもするんです、てのは、生きた振りをしないと死んだ振りもできませんからね……」

話が長くなりそうなので、途中でお引き取りいただきました。

＊

言葉が言葉である。言葉を言葉として読む。そのことに異常にこだわる人がいるようです。性格の問題だと思われます。人それぞれですね。

日常生活の演技、テレビドラマの演技

＊

私たち誰もが生まれたときに、すでにまわりであって、それを真似たり学んだりして自分の中に取り入れていく。その意味で、言葉は私たちの外であって、外からやって来るものだと言えるでしょう。

そんなものの例として、動作を加えてもいいと思います。

じつのところ動作と言葉にはよく似たところがあり、げんに動作が言葉となっているものに手話があります。私は障害者手帳を持つ重度の中途難聴者なのですが、難聴が進行するのを恐れて手話を勉強していた時期がありました。

日本で広く用いられている手話には、日本語とは別の言語である日本手話と、日本語に対応させた日本語対应手話がある。手話の勉強中に、そんなことを教えてもらいました。両者の違いについては、どうかお調べください。

習った手話はごく初歩的なものでしたが、いまではすっかり忘れてしまいました。使う機会がないからでしょう。言葉は使いながら覚えていくものだと痛感しています。その代わり、補聴器や字幕や筆談のお世話になっています。

すっとぼけや空返事——聞こえなかった振りや分かった振りをするのです——もうまくなつたもようです。ついつい、そんなことをしてしまいますが、その場しのぎですから、何の解決にもなりません。悪い癖です。

＊

私は朝の連続テレビ小説が好きです。ほぼ毎日見えています。

何がおもしろいのかといいますと、パターンなのです。音声聞き取れないので、家

事をしながら字幕のあるテレビ画面で見ているのですが、俳優の表情と動作から、ストーリーやその場の状況をつかもうとしている自分に気づきます。

字幕を見ていないときもあります。それでも大まかな状況やストーリーが読み取れるのです。表情と動作にはパターン、つまり決まった型があり、それに助けられて、いま起こっている出来事を推測したり、次に起こることを予測したりするわけです

あと、顔芸も大切です。目や眉や口や顔の筋肉の動きは、表情という形であらわれますが、朝の連ドラは演出がしっかりしているからか、俳優さんたちはとても分かりやすい表情をします。

こういう分かりやすい演技をくさい演技ともいいますが、ある程度くさくないと、こっちは分からないのです。

*

顔芸だけでなく顔も大切な要素です。ドラマで誰か新しいキャストが登場するとします。初めて見る人というか配役が出たとたんに、これは悪い人だとか、これは暴力的な人だとか、これはいい人だとか、これはいい人ぶった悪人だとかが瞬間的に分かるのです。

で、そのまま見ていると、やっぱりねという展開になり、満足する自分がいるのです。じつによく分かるのです。さすが全国津々浦々の老若男女を対象にしているだけあります。

よく出来ているなあと感じないではられません。

だからこそ、ドラマが大の苦手な私が、何年も見続けているのだと思います。シリーズが変わっても、分かりやすさは変わりません。不動の安定感。伝統の分かりやすさ。これはすごいと思います。

*

動作や仕草や表情には個人差もありますが（あと文化や地域や言語による違いもありますね）、地域を国内に限ると共通する部分のほうが多い気がします。ましてドラマやお

芝居の演技は作られたものですから、分かりやすいように、つまり伝わりやすいように演出されているのです。

ジェスチャーとか身振り言語という言い方がありますが、身振りや表情は言葉であり、言語だと思います。言語である手話には文法もあり、手話言語学という分野もあるそうです。

とはいえ、手話を用いている人たちは、文法を習って覚えたわけではありません。日本語やその方言と同じく、生活の中で真似て学んでいったのです。

※聴力に障がいを持つ人たちにとって、かつての聾（ろう）学校と現在の特別支援学校の果たした、そして果たしている役割はとても大きいです。日本手話は日本語とは異なる言語ですから。

*

動作や仕草や表情ですが、テレビドラマやお芝居や映画で演出されたものと、日常生活で目にするものとは、似ているところもあれば、異なるところもあります。ある同じ動作、仕草、表情が異なった意味あい使われたり、異なったメッセージを発しているという状況もきわめて多いと感じられます。

ある動作がふたつ以上の意味を持つ、あるいは「意味を持つらしい」なんてことも、日常生活ではざらにあります。これは状況や、誰がその動作をしているかによって決まることもあるし、そうではない、あるいは「そうではないらしい」場合もあります。

日常生活で見掛ける身振りや表情は、テレビドラマの演技（とくにくさい演技つまり分かりやすい演技）よりもはるかに複雑であり、複雑怪奇と言いたいくらいです。

ぶっちゃけた話がよく分からないのです。あれよあれよと、現実が進んでいきます。

つまり、「意味を持つらしい」とか「そうではないらしい」と書いたのは、確かめることができない時と場合がけっこうあるという意味です。相手とのやり取りを中断して、

その意味を確かめるといのは、じっさいには難しいからです。

障がいを持つとこういうことはよくあります。遠慮が働くのかもしれませんが、単に面倒だという理由もあります。

＊

動作、身振り、仕草、表情。

真似る。振りをする。演じる。

身振りや表情を見て、その意味やメッセージを受け取る。あるいは受けとり損なう（意外とこのほうが多いのです）。

身振りや表情を受けとり損なうことがよくあるのは、言葉と同じく身振りや表情が外にあって、外から来るものだからではないか。

外にあるものは、所有できないし（自分のものにならないし）、共有する（他の人といっしょに使う）のもままならないのではないか。

外にあって、外から入ってくるように見えて、それは入ってきたと言えるのか。

外にあって、外から入ってきたとして、それを思考の助けとして、あるいは伝達の手段として使うことが可能なのか。

可能だとして、どれだけの有効性があるのか。どのような限界があるのか。

自分の問題として、自分の身のまわりを見ながら、自分で考えてみたい。

最近、そんな気持ちが強くあります。

言葉ではない言葉

＊

外出して赤ちゃんを見掛けると観察します。子を持った経験がない私ですが、かわいいのでつい目が行くのです。赤ちゃんと目が合うとうれしいものです。いまはマスクをしていることが圧倒的に多いので、目で笑うというかほほ笑むように必死に努力します。

こっちの笑みに気づいたのか、ほほ笑み返してくれると、もうめろめろになりますが、お母さんや周囲の人の目がありますので、涙をこらえます。

ここまでの文で、目、見、笑という語を何度使ったでしょう。言葉を交わせない相手とのやり取りでは、目、見、笑が大きな役割を果たします。笑は表情のひとつですが、表情とは感情が表にあらわれることですね。

＊

言葉（話し言葉と書き言葉）を交わせない相手とは、私の場合には日本語の通じない人ということになります。

母語が日本語ではなくて日本語が堪能ではない人（外国籍の人だけとは限りません）、脳梗塞や脳外傷によって失語症を患っている人、認知機能の低下した人が頭に浮かびます。

人ではありませんが、ペットや家畜がそうですね。人にとって大切な存在です。人が支えられているという意味です。ヒト以外の生き物すべてがそうだとと言えるでしょう。この星にいっしょに住んでいる仲間ですから。

＊

母語の話し言葉と書き言葉だけを使って他者との触れあいや、やり取りをしているわけではないことに気づき、啞然とします。

身振り、仕草、表情（目、眉、口、鼻、顎や顔の筋肉の動き）、音声（叫ぶ、泣く、うめくなど）。話し言葉と書き言葉以外の、広い意味での言葉が用いられている環境で、私たちは生きているようです。

人が言葉を使うのは、伝達、つまり伝えるだけではありません。伝えようとする思いなしに、言葉が使われる場合は多い気がします。

赤ちゃんとの生活では、伝える以外のやり取りがかなりの部分を占めているように見えます。はい、メッセージを送ります。はい、そのメッセージをたしかに受け取りました。こんなふうになっていないみたいに見えるという意味です。

ただ笑みを送る。ただ笑みをもらう。ただしかめつらをする。すると、あっちもしかめつらを返す。こんなふうに見えるやり取りをさかんに目にするのです。

一種の遊びなのでしょう。プレイですね。プレイには、遊戯、遊技、演技、演劇、競技、演奏といったさまざまな意味がありますが、そのどれもが、笑みや表情のやり取りに含まれている気がします。

「振り」と「演じる」がメッセージなしに空転しているように見えてなりません。何か目的のある「伝える」ではなく、ただ演じられているし、振りがおこなわれているのです。

こうした光景は、赤ちゃん相手だけに見られるのではなく、人と人の関係で広く見られる気がします。

＊

ただいっしょにいる。ただいっしょにいてやる。ただいっしょにいてもらう。いっしょにいれば、不動なんてことはないでしょうから、そこに何らかのやり取りや交流が生まれるはずです。

言葉が通じる相手であれば、言葉と言葉以外の言葉——身振り、仕草、表情（目、眉、口、鼻、顎や顔の筋肉の動き）、音声（叫ぶ、泣く、うめくなど）——、言葉が通じない相手であれば、言葉以外の言葉。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる、だく・だかれる。

目をつむって、上の動作をしたり、思いえがいたり、思いだすと分かりますが、「する」と「される」が同時に起きている場合があります。これを一体感と言い換えることもできるでしょう。

いやし、安らぎ、怒り、悲しみ、よろこび、楽しさ、いらいら、もどかしさ、ままならさ、苦しみ、しあわせ、安心感、ただいっしょにいるという充実感。言葉にならない感情。

半年だけいっしょに暮らした犬のことを思い出します。言葉ではない言葉のやり取りがたくさんたくさんありました。こちらが話し言葉で話しかけても、それが相手に言葉として伝わっている保証はありません。

それでもこっちは伝わっていると勝手に思うこともありました。後付けで考えると、言葉以外の言葉も、外にあって、外から来るものなのですね。自分の中に入るのかもしれませんが、それは必ずしも思いどおりにならないという意味では、外なんです。

＊

外にあって、外からやって来て、外であるもの。

言葉も、言葉以外の言葉も、そういうものだという気がします。そして、言葉や、言葉以外の言葉を交わし、やり取りする相手もまた、そういうものだと思えてなりません。たぶん、自分もまたそうなのでしょう。自分にとっても（自分もブラックボックスなのです）、相手にとっても、です。

外から生まれて、外に囲まれ、外をながめて生き、外へと帰っていく——。身も蓋もない言い方になりましたが、これは決して悲しい話ではないと思います。

言葉の重み

＊

連日報道されるニュースを読んだり見たり聞いていて感じるのは、言葉が大切にされていて、同時に言葉がないがしろにされている事実です。「大切にする」と「ないがしろにする」が同時に起きているという意味です。

人のやっていることは、たいてい最終的には言葉になります。言葉にされて、言葉として処理されるのです。

何が言葉にされ、言葉として処理されるのかというと、現実や思い、そして言葉でしょう。具体的には、現実とはたとえば事件や出来事、思いとはたとえば願いや不満、言葉の例としては発言や書簡や法が挙げられます。

＊

司法の目的は逮捕でも身柄の拘束でも処罰でもなく、書類を作成することにある――。

学生時代に、そんな意味のことを読み、感心したことを思い出します。あらゆる事件は最終的に言葉として処理され、保管されるということですね。事実、そうなっています。

司法だけではありません。立法も行政も、最終的には書類作りで完了します。それが官僚にとっての完了なのです。後のことには関知しないみたいです。現場が苦勞するだけ。人々に付けが回ってくるだけ。選んだ付けが。

なぜでしょう？ どうしてこういうことが起きているのでしょうか？ 法が言葉だからです。正確に言えば、法は書き言葉であり文字なのです。書き言葉の処理がうまい者が優秀な官僚なのです。あと、口先でしょうか。

歴史は、書類をもとに編まれます。その積み重ねが文化であり、文明であると言えます
うです。

＊

話を戻します。

ある事件や出来事を言葉にすると、すったもんだが起きます。言葉の応酬が、喧嘩、
取っ組み合い、殴り合い、殺し合いへといたるのは、皆さんご存じのとおりです。

言葉や言葉遣いをめぐっての争いであることに注目しましょう。言葉に過剰にこだわ
るのは、人と言葉の間にただならぬ関係がある証左ではないでしょうか。

ひとつ例を挙げると、住民の保護、平和的解決、侵攻、侵略、このどれもある出来
事を指しています。こうした言葉が世界中を飛びかうのです。ああでもないこうでもな
い、ああだこうだ、と。飛びかう言葉が銃弾やミサイルや爆撃機の前触れに見えてきま
せんか？

言葉のうえで辻褄さえ合えばいい。

万事がそんな感じで処理されます。法が言葉だからでしょう。法律、法則、宗教的な
意味での法、つまり教え、これらすべてが言葉として存在しています。

情報も言葉です。現在は情報がきわめて大きな役割を果たしています。具体的には、情
報操作、宣伝、情報戦です。これらを制した者がすべてを制します。

戦争と平和が同義になる。解決と開始が同時に起こる。善と悪という言葉が応酬され
る。合法と非合法、法治国家と無法国家、フェイクとファクトとトゥルース、法に則っ
てと法を無視してと法を曲げてが複数の集団の思惑に沿って同時に起きる。ご飯論法ど
ころではありません。

各国には、辻褄合わせのオーソリティがいます。言葉の体裁をつくろうのに長けてい
るのです。官僚、政治家、そして現在ではおそらく広告代理店も。みんな代理なんです。

みなさんの。

争う当事者たちのそれぞれが、言葉のうえで辻褄を合わせるという点は同じなのです。それぞれが合法を主張し、それぞれが自分たちの善と正しさを訴えます。最終的には、力、権力、武力で決まっているのに。

銃を持っている側は強いです。正確に言うと、「合法的に」銃を持っている側、つまり権力です。

「合法的に」銃を持った側の主張が辻褄合わせのさいの論理の柱になります。論理とは、えてしてそういうものです。権力と武力こそが論理の支えになります。

まだ言葉のうえでの辻褄を合わせようとしているだけましののでしょうか？

言葉の辻褄を合わせることさえしようと努力しなくなったら、いったいどうなるのでしょうか？

＊

言葉が大切にされています。言葉がないがしろにされています。両者が同時に起きています。

こうした事態に対してなすすべはあるのでしょうか。歴史を見ると、同じことが繰り返されているのに気づき、無力感におそわれます。

言葉が重いことだけは確かなようです。繰り返しますが、法が言葉だからでしょう。法律、法則、宗教的な意味での法、つまり教え、これらすべてが言葉として存在しています。そして、情報もです。

人は言葉にひれ伏しているかのようです。それなら、言葉を大切にしてほしいと言っても、それぞれが「大切にしているし尊重しているじゃないか」と答えるでしょう。

言葉は人の外にあるのかもしれませんが。人類だけでなく、それぞれの人の外に、です。手をつけているつもりが、手がつけられないのです。手が届かないのです。手中にないことは確かでしょう。

逆にいうと、外にあるからこそ、言葉にひれ伏し、言葉のうえでの辻褃を合わせるのに血道を上げるのです。崇拜の対象は外に存在するものでなければならぬとすれば皮肉なことです。

言葉をあがめる

＊

誰もが生まれたときに既に外にあって、外からやって来て、外から中に入ってくるように見えながら、外であり続けるかのような顔をしている言葉。

この言葉を人は崇めています。その前でひれ伏しています。

人のするあらゆる行為、人の目にするあらゆる出来事、人のあらゆる思い、そして人の話し書くあらゆる言葉が、言葉として、つまり話し言葉として語り継がれ、書き言葉として複製され保存されているかのように見えます。

見えるだけです。そう言われているだけです。じっさいには多くのものが忘れられ、見過ごされ、ないがしろにされ、語られずにきたにちがいありません。

人の歴史と人の物語はまだらで、ぼやけて、すかすかなのです。部分的、局所的、ローカルでもあります。ヒトの知覚は相対的なものであり限界があるのですから当然です。

しかも、人は忘却を都合よく忘却します。この資質はたいしたものです。忘却は集中でもありますから。

容量が決まっていて、ある部分をどんどん忘れていかないと他の部分に集中できないという意味です。

たぶん都合の悪いことを忘れます。おまけに、忘れたことといっしょに、忘れたというのを忘れてしまいます。当たり前ですけど、よく考えると、よくできています。

＊

人は知りうることをすべてを言葉にすることに血道を上げ、言葉のうえでの辻褃合わせに終始している。

言葉の前にひれ伏し、言葉を崇めているとしか考えられません。

人にとって言葉とは超越した存在なのでしょう。

外にある言葉。彼方にある言葉。外にあり、彼方にありながら、中にもある。この二面性こそが、言葉の最大の特徴であり、不思議さです。

そのために、いまここではないのに、いまここに感じられるのです。ないのにあるようにも感じられます。

この感覚を覚えてしまうと、もう抜けられません。しがたい人をやっていて、こんなに気持ちがいいことはないからです。

この気分させてくれるものにひれ伏します。それが人情でしょう。自分を見ているとつくづく、そう思います。

＊

・言葉は魔法

・言葉は最強の嗜好品、薬物（ドラッグ）

・言葉を入れるとめっちゃくちゃ気持ちがいい。出すのもめっちゃくちゃ気持ちがいい。

・言葉は「ない」を「ある」、「ある」を「ない」にする。言葉自体が「ない」であり「ある」でもある。

・あらゆる教えや経典やおまじないやのろいや託宣やご託宣や伝説や新旧の神話や物語や法や法律や法則が、話し言葉や書き言葉として記述されて、保存されている。

・記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

・人は言葉を代表とする代理に牛耳られている。

・人は一時的に言葉になる。

＊

言葉の二面性について考えてみましょう。

言葉は消えます。話し言葉、つまり音声はたちまち消えます。録音したり、文字にする方法もありますが、ほとんどの話し言葉は瞬間的に消えます。記憶に期待するしかなさそうです。じっさい、そうであったと想像できます。昔話や伝説のたぐい、つまり口承と呼ばれているものです。

書き言葉は文字という形でいちおう残りますが、複製しないといつかは消えます。複製もいつかは消えるでしょう。残しても誰にも読まれない文字が圧倒的に多いにちがいありません。たとえば、この文章がそうです。

＊

消えたり、記憶から忘れ去られたり、読まれなかったり、捨てられたりするものがほとんどである言葉ですが、残る場合もあります。書き言葉がコピーされる、つまり写本や印刷や複写や電子化されて複製されるという事実には驚かされます。

無限の複製と拡散が可能になった現在、「言葉」は「知識」から「情報」へと流行名を変えたように見えます。出世魚を連想しないではられません。

複製というのは、考えれば考えるほど大したものです。書き言葉がそっくり残るだけでなく、増えるのです。これは、文字が形という抽象的な存在でもあるからです。

詳しく言うと、文字はある意味で抽象ですから形だけでは存在できず、インクや墨や掻いた跡や画素の集まりという物質をともなうことによって、はじめて目に見えるのです。

電子的な複製の処理については知りませんが、文字として見る場合には、物質でもなければならぬと言えます。文字には抽象と物質の両面があるということですね。これが書き言葉つまり文字の二面性です。

話し言葉つまり音声も、声帯の振動、空気の振動、鼓膜の振動という形で伝わるわけですから、声帯、空気、鼓膜という物質と、振動や波という抽象の両面があると言えます。これが話し言葉つまり音声の二面性です。

素人の大ざっぱな説明で恐縮ですが、そんな感じで理解しています。誰が何と言ったか、何とかいう本に何と書いてあるかには興味がありません。

いまこの時点で自分の中にあるもので、ああでもないこうでもないをするだけです。それがわくわくするからです。

*

具象であり抽象でもある。物質であり心象でもある。この二面性があるからこそ、人が言葉にこれほどこだわり、言葉をないがしろにしながら大切に、結果として言葉を崇め奉っている。そんなふうに見える。

この二面性があるから、人の中に入ってくるのです。入って何になっているのか、何をしているのかは知りません。知ることはできないでしょう。なにしろ、中も外つまりブラックボックスなのですから。

語り騙るしかなさそうです。この文章のように。

言葉という代理を使うのです。かたる以外に何ができるのでしょうか。とはいえ、代理は偉いのです。世界は代理によって牛耳られています。

代理が偉いことを、人は頭ではなく体感的に知っていて崇めているのでしょう。ひょっとすると本能的に、かもしれませぬ。

言葉を獲得したヒトは本能が壊れた——なにしろ「ない」を「ある」に、「あっち」を「こっち」にする錯覚装置および錯覚の体系を獲得したのですから——という説がありますが（ほんまかいな）、そのうえ文字というアクロバットを発明してしまったのですから、おおいにありうる気がします。駄目を押された感があります。とどめを刺されたのではないことを祈るばかりです。

抽象を体感する、体感を抽象する

人にとっては、たとえばニワトリがずらりと並んでいるのと同じです。そのニワトリをペットにしているのなら話は別ですけど。「たったひとつ」と「たったひとつではない」とは、人にとっては、それくらいの意味なのです。

女優のプロマイドと、商標の付いた缶スープの絵を並べて見せた例のあの「有名な」芸術作品は、発表された時点ではおおいに衝撃的であったはずですが。

女優はたったひとりの人（固有名詞と同じ）ですから、上の「カフカ」に相当します。缶スープは大量生産された商品ですから、上のマカロニに当たります。両者が複製されずらりと並ぶと、「たったひとつ」も「その他おおぜいのひとつ」もコピーという点で同列になるという衝撃です。複製拡散時代の到来をアートの作品という形で示していたと言えるでしょう。

現在ですが、目の前に複製がずらりと並ぶどころか、世界中のあちこちで複製やにせものや似たものが無数に並んでいるさまを想像すると、あっけにとられて言葉を失います。

話はそれだけにとどまりません。

上のマカロニがマカロニではなくマカロニであったとしても分からないのですが、体感していただけたでしょうか。カタカナのカと漢字の力、そしてカタカナのロと漢字の口の区別は難しいです。私には無理です。

複製に見えるまがいものがあります。複製という名のまがいものもあります。言葉の綾ではなく具象つまり物としてです。

現在では、ずらりと並んでいる複製に見えるものさえ、それが果たして複製なのかどうか怪しくなっているという意味です。完全なコピーなど抽象であるという意味です。

現在は、複製における変異、エラー、ノイズ、意図的改ざんの時代なのです。代理であるはずのコピーが復讐しているのかもしれませんがね。一種の代理の反乱です。

マカロニという具体的な文字列から、複製というまぼろしのまやかしと、新しい形の

代理のありかた・ありようを体感していただけたなら幸いです。

＊

カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、
カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、
カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、
カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ、カフカ

これも気になります。なんであそこが抜けているのだろう。なんか意味があるの
だろうか。意味なんてないのだろうか。

意味と無意味は紙一重とか裏腹とか一心同体とか見方次第とかじつは同じだなんて感
じがしてきます（具象と抽象にそっくりです）。無意味を辞書で調べると意味があったり
して、よけい混乱します。

＊

眠れぬ夜によく考えることがあります。

定番は、地動説を体感できるかとか、脳が脳を思考するとはどういうことか、です。最
近では、具象と抽象とか、具象と抽象を行ったり来たりとか、愚笑と中傷とは？ とか、
です。頭がさえて眠れなくなることもあります。

先日は、外と中について、考えていました。あっちとこっちと同じく、相対的なもの
です。向こうから見れば、中が外になります。

こそあど。こっち、そっち、あっち、どっち。here、there、where。

こういうのも不思議によく考えます。言葉の綾と言葉の抽象と言葉の具象の間を行っ
たり来たりするのです。そのうちに眠くなります。

＊

「そと」と「なか」だけなら、まだいいのですが、「よそ」と「うち」を加えて考えるとまた眠れなくなります。

上下もそうです。「うえ」と「した」ならいいのですが、「かみ」と「しも」を考えるととたんに目がさえてきます。邪念や雑念や妄念でいっぱいになります。

外は外なの、中は中、上は上、下は下、真実と事実はシンプルなの。なんて言い聞かせても無理みたいです。どうでもいい、つまり不毛なことにこだわって、不毛の二毛作三毛作どころか、不毛の多毛作になってしまうのです。毛がないのに。

*

昨夜というか今朝というか、トイレに立ってベッドに戻り、眠れないので寝返りを打っていたところ、上と下が気になり始めて、仰向けになって体感する上と下と、うつ伏せになって体感する上と下と、右を向いて寝ていて体感する上と下と、左を向いて寝ていて体感する上と下とが、異なって感じられることに、この歳になってはじめて気づき、嘖然となり、七転八倒していました。ベッドで逆立ちは危険なのでしませんでした。

いまこの文章を読んでいらっしゃる方は、たぶん立っているとか座っていると思います。その状態で上と下を想ってください。考えるというかイメージしてみてください。次に仰向け、うつ伏せ、横向きに寝て、やはりイメージしてみてください。

訳が分からなくなりませんか。とくに、うつ伏せです。次に「かみ」と「しも」で試してみてください。こっちだと、どの姿勢でも、あまり違いはありませんよね。人それぞれですけど。

個人的には、うえとしたは具象で、かみとしもは抽象ではないかという気がします。具象は体感に左右されます。天動説がそうです。抽象は体感には関係なく観念として記憶されている知識や情報だという気がします。地動説がそうです。

今夜、また考えて、いやイメージしてみます。

ところで、無重力空間ではどうなのでしょう？

あと左右も気になってきました。ぐるぐる回りながら左右が分からなくなったこどもの頃の記憶がよみがえってきました。時計の針の方向に、つぎはその逆に、という具合に回るのです。右が左に、左が右になったりします。しまいにはぶっ倒れると、左右が上下になったりします。左右上下は単なる言葉じゃないかなんて言いたくなります。

それはさておき、みぎとひだりは、右大臣左大臣の、左右とは違うみたいです。政治的なみぎひだりとも違う気がします。どっちかという右往左往のほうみたいです。私の人生そのものじゃないですか（足腰が弱まり最近千鳥足も加わりました）。

これから、ちょっと久しぶりに回ってみます。転倒に気をつけながら。

引用と演技からなる自分

＊

引用の織物

自分が引用の織物みたいに感じる時や場合があります。自分が単一で一様な自分ではないとか、自分の中に複数の他人が入っている感じです。自分が誰かを演じているように思えることもあります。

私はきょくたんに交際が薄い人間なので、人と接する機会はかなり少ないです。病院だけは行きます。行かなければならないから仕方なく行っているのですが、お医者さんや看護師さんやスタッフの前で、誰かを演じている自分を感じます。

卑屈な態度になっているのです。ぺこぺこ、へいへい、おどおどなんて感じです。こういう態度は誰かを真似ています。たとえば、テレビで見たおどおどしている仕草、ある俳優の演技、朝の連ドラのあるシーンで見た仕草と表情なんです。

無意識に誰かを模倣することで不安や恐怖をやわらげている気もします。

そういえば、病院で見掛けた他の患者さんの身振りや表情を自分が演じている場合もあります。

＊

病院には独特の雰囲気があります。私に問題があるのでしょうか、みんなそっくりに見えるのです。みんな誰かを真似ているのでしょうか？ よく見ればみんな違います。でも、みんながすごく似通って見えるのです。とくに表情と仕草と身振りが。

交わされる言葉が限定されているし、スタッフも患者も、する行為がほぼ同じだということもあるにちがいません。病院という、ある意味で非日常的なその場がそうさせているのかもしれませんが。

ひょっとして真似し合っている。引用し合っているのではないか。

こういうのが「空気」なのかもしれません。ある場があって、そこで人々が模倣し合っ
て空気が作られるのではないか、という意味です。

人は引用し合う、模倣し合うというのは、言えている気がします。言葉だけではなく、
身振りや表情を。あと、醸し出す雰囲気とか、たたずまいとかも。

まわりに染まる。ある集団内で——一時的なものであっても——その場の空気や景色
に擬態する感じ。人間カメレオン説。

*

照れ笑いとかがまかい笑いという言い方がありますね。えへへとかてへぺろという感
じ。あれなんかは、ひとつの表情のパターンがあって、それをみんなして演じている、つ
まり身振りや演技を共有している気がしませんか。

あっそうか、なんて言うときの頭を拳固でコツンとやる。すみません、と言いながら、
首をちょこんと前に出したり、舌を出す。肩をすくめる、肩をすぼめる。ピースサイン。
頭をかく。あっかんべーと舌を出す。赤ちゃんに向かって、いないいないばあーをする。

いま述べた仕草や表情には身振り言語とかジェスチャーと呼ばれるものも含まれてい
ます。つまり一種の言葉なんですね。だから共有しているし、共通なのだと考えられま
す。こういう身振りは地域、文化、言語によって異なるものもあるようです。

顔、表情、言葉

いないいないばあーで思いだしましたが、赤ちゃんにとって最初の、つまり人にとっ
て最初のやり取りは笑みの交換かもしれません。赤ちゃんにとっておそらく自発的な笑
みが、それを見たまわりの人にも笑みをもたらすとすれば、それは一種の引用ではな
いでしょうか。

逆に、赤ちゃんのほうから、まわりにいる人の顔かその表情を見てほほ笑んだとするなら、赤ちゃんは生まれて初めての引用をしたことになるのかもしれませんが。

どっちが先かなんて分かりませんよね。どっちでもいいことです。とにかく、笑みのやり取りはあると思います。

赤ちゃんにとって、つまり人にとって最初の言葉は顔とその表情だという気がします。

顔言葉起源説。はじめに顔ありき。

とはいえ、起源なんて、どうでもいいです。「その後」である「いま」のありようのほうがるかに大切です。私たちは、いま生きているのですから。

赤ちゃんがまわりの顔を見て笑うとすれば、それは真似たというよりも、自然とそうなった気がしてなりません。人はそうするようにできているのかもしれませんが。

ひいては、あらゆる生き物がそんな感じで引用し合っているとすれば、この星とこの星に住む生き物たちは、うまくできているなあと感心してしまいます。そういえば、ペットの犬は人を引用している部分があるみたいだ、とふと思いだしました。そうだとすると複雑な気持ちになります。

自分で話をでっちあげて、自分で感心したり複雑な気分になっていれば世話ないです。

＊

自分では絶対にしない仕草や表情もあります。「あの人、これよ」なんて口にしながらか、指をそろえて手を広げて、少しそらせ気味に、その手と左右逆のあごに当てる仕草があります。

やってみてください。私はあれが嫌いのでざったいにしません。いまはあまり見掛けな

くなったのは、時代の流れでしょうか。けっこうなことだと歓迎しています。

あと、ピースサインも私はしません、これは照れくさいからです。写真で見る私はどれもぶすっとしています。

言葉で決まり文句というのがありますが、仕草や表情でも定型みたいなものがあって、それが共有されている。これはじつに興味深い現象だと思います。定型ではなく、お笑い芸人さんとかのギャグでよく知られたものがあります。

これが流行ると一種の定型になりますが、これはその芸人さんにとっては名誉でしょうね。

それを人が真似るときには、その芸人さんになった気分になっていると思われれます。その芸人さんを引用しているのです。その芸人さんが一時的にあなたの一部になっているとも言えるでしょう。

引用はなりきり

引用はなりきり。言えている気がします。noteの記事を読んでいると、まさにこれです。度が過ぎると、なりきりどころか、なりすましかもしれません。引用と剽窃の区別は難しいです。剽窃から遠く離れて。

持論なんですが、固有名詞（とくに人名と作品名と書名）の使用も引用だと思います。良い悪いは別として、引用と同じく威を借りることに違いはありません。だから固有名詞をなるべく使わなかったり、引用に消極的なわけではありません。私のことです。

性格とか気質の問題でしょう。誰々が何々で何と言ったには興味がないのです。これまでたまたま見聞きして自分に入ってきたもので十分なのです。研究者でも探求者でもありません。

自分でああでもないこうでもないをするほうがわくわくするのです。そもそも、自分

には既に複数、いや無数の他者が織りこまれていてからでしょう。

いま自分の中にいる他者たちと付き合うことが、考える、書く、そしてたぶん読むことではないかと思います。

とはいえ、人それぞれです。

＊

お笑い芸人さんだけでなく、俳優さんがあるドラマで演じているキャラクターとか配役としての仕草や表情や科白が流行し、真似る人が続出したなんてことが昔はありました。いまはテレビ自体を見る人が激減しているので、テレビドラマが爆発的なヒットをすることもなくなりました。

その代わりに YouTuber を真似るこどもたちが増えているようです。ユーチューバーのある回のある仕草とか科白をクラスの誰かが演じて、それを知らない馬鹿にされるなんて話を聞いたことがあります。

あと、まわりが作った自分のイメージに合わせて、その作られた自分を演じてしまうというのよく聞きます。とても苦しいそうです。自分を演じる自分ですか……。うーむ。

形態模写をされるタレントとか歌手が、模写されている自分を演じる場合を思い出します。コロッケさんが真似る〇〇さんを演じる〇〇さんみたいに。こっちはげらげら笑って見ていましたけど、ご本人は案外苦しいのかもしれないね。不本意。意に反しての演技でしょう。

演じる

人が誰かを演じたがる。決まり文句とか定型とか共通語とか方言とか流行語のように存在する身振りや表情を、自分もなんとなくやってしまう。無意識にやっている自分に気づく。

身振りや表情だけでなく、ある特定の言葉や言葉遣いや言い回しや語尾やイントネーションを真似ている自分がある。

歯医者さんとかかりつけの内科のお医者さんとは、その前で違う自分を演じてしまう。お父さん、お母さん、こども、恋人、あるいは配偶者の職場を偶然に覗いてみたら、ぜんぜん違ったその人がいた。化粧を変えたら、服装をがらりと変えたら、髪型を変えたら、いつもとは違った歩き方や、話し方や、人との接し方をしている自分がいた。

人が引用の織物であったり、複数の人の断片から成りたっている。そうしたことが、意外と日常的に起こっているのではないのでしょうか。

多重人格とか、憑依とか、分身とかドッペルゲンガー（自己像幻視）なんていう、おかげさで、おどろおどろしいものではなく、人にとって当たり前の現実として、みなさん経験なさっているのではないのでしょうか。

女性の中に男性がいたり、男性の中に女性がいたり、おとなの中にこどもがいたり、その逆であったりするなんて、楽しいじゃないですか。人生が豊かに感じられませんか？ べつに異常ではないと思いますよ。度が過ぎなければ。

いや、度が過ぎてもそれがその人の生き方なら、尊重してもいいのではないのでしょうか。その人というのは、あなたの身近にいる大切な人を含みます。そして誰よりもあなたのことです。

＊

母親、娘、女、妻、会社員、自治会副会長、わが家の生き物かかり、Aさんの前の私、Bくんのまえのあたし、アイドルのCさんと空想の会話をするときのわたし……。

あと、ゲームをやっているときのわたし、ゲームであるロール（役割）を演じているときのわたし、本を読みながら登場人物に染まって成りきっているときのわたし。本だけではなく、映画、お芝居、テレビドラマ、こうしたものは演技です。演技を真似る、演技を演じる。複製と同じです。コピーのコピー。

競技後のスポーツ選手のインタビューを見て、ああいいなあと思ってその気持ちと表情を借りる。最近のアスリートの言葉はすごいです。

名言だらけ。自己啓発書みたい。コーチやコーチングの成果です。優秀な選手には超一流のコーチが付いています。お金がかかっているという意味です。言葉も表情も借り物。借りて返す。他の人に返す。他の人も元気になる。いいですね。おすそ分けじゃないですか。

おすそ分けも一種の引用でしょうね。分ける、分け合う、貸し借り、ギブ・アンド・テイク。こうして関係が生まれるのです。

みんなが引用し合う。誰もが他の人のその時の「自分」を借りて、別の人に引用してもらう。引用の連鎖。

話が広がりすぎました。人はさまざまな役割をまとめて生きているということでしたね。

ほら、人は役割と人間関係だけの数の自分があるなんて言うじゃありませんか。楽しくありません？ このさい、居直って楽しみましょうよ。

自分だけ

そもそも、人は誰もが言葉と表情と仕草のある世界に生まれ、まわりの人を言葉や表情や仕草を真似ながら、それを使い演じてきたのではないのでしょうか。

それなのに、自分は自分、自分（だけ）の言葉がある、自分（だけ）の思いや考えがある、自分（だけ）の仕草や表情がある、自分（だけ）の行動や生き方がある、そんなふうには思ったり、思いたがったりするのではないのでしょうか。

そういう生き方もいいでしょうが、自分が複数形であるとか、複数ので他面的な存在

であると考えてみたらどうでしょう。自分が解放されたり、豊かに感じられたり、逆説的ですが、より自分らしく生きられるかもしれませんよ。

からっぽの自分、うつせみ

最近思うのですが、自分ってままならないものですよ。自分の顔とか表情とか身振りだけでなく、自分の思いとか記憶とかも。もちろん、体も。言うことを聞いてくれないんです。

外にあって、外からやって来て、外であるもの——なんて、このところ言っていますが。自分が外に感じられるって意味です。

現実、思い、言葉（話し言葉や書き言葉に加えて身振りや表情も含む）——これらがぜんぶ外ってことになったら、私は空になるじゃないですか。そらじゃくて、からとかくうです。無。ある意味納得している自分がいます。あ、そうだった。自分は空っぽなんだった。

空っぽ、すかすかで、すっからかん。まさに、うつせみではないですか。

うつせみ、現身、空蟬、虚蟬——。私の大好きな言葉です。

うつせみのあなたに 短文集 その2

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
